

イラン北部における鉄器時代の地域集団とその構造

— セトルメントシステム分析を中心に —

有松 唯

要旨 現在のイラン・イスラム共和国にあたる地域では紀元前1千年紀半ば以降、アケメネス朝ペルシャやメディア王国といった広大な領域国家が成立する。こうした勢力の成立過程や実態については詳細に明らかにし得る文献史料が乏しいこともあり、考古学的研究が盛んに行われてきた。しかし従来の研究は分析対象地域がイラン西部のザグロス山脈に沿った地域に限られてきた。また、対象となる政治勢力の領域の広さゆえ、分析対象の設定や解釈といった点では比較的大まかな視点での検証が主であった。そのような視点ももちろん必要ではあるが、いくら広大な領域国家とはいえ、その実態はいくつもの地域社会、ひいてはその地域社会を構成する地域集団、つきつめれば個々のムラの集積のはずである。こうした具体的社会構造の解明もまた、それらの理解には不可欠であろう。

本稿では政治集団の基底構造としての地域集団について、その構造及び成立過程の解明を目的とする。その際従来こうした研究の対象とはされがたかったイラン北部を対象とし、それら政治勢力の成立期にあたる鉄器時代（前1450 - 550年）における遺跡分布と土器分布の分析を行った。その結果、メディア王国成立期にあたる鉄器時代III期には地域集団領域の広域化あるいは集団間関係の強化が起こったと推定された。地理条件に左右されず、複数の生業形態を包括した交流網が構築されたものと考えられる。同時に、集団間を結び付けるセンターとしてテル状遺跡が新たに出現したことが明らかになった。さらに、新たなセンターが出現する地域で特に居住遺跡が増加し、面的に広がる高密度の遺跡群が形成される様相がみられた。これは、地理条件に左右され、地域ごとに遺跡が散在して異なる土器の様相を呈していた前時期までとは大きく異なる傾向である。前時期の断絶的且つ排他的、流動的な地域集団の様相と比べれば、鉄器時代III期における地域集団のあり方は大規模な政治集団形成には有効に機能したと考えられる。該期における領域国家出現と連動して、こうした地域社会の動向があったことを指摘したい。

1. はじめに

現在のイラン・イスラム共和国（以下、イラン）にあたる地域では、前1千年紀にアケメネス朝ペルシャやメディア王国といった領域国家が相次いで成立した。その出現期は鉄器時代に相当し、前1450年から550年にかけて年代付けられている。

鉄器時代における領域国家出現の歴を解明するための試論として、本稿ではそうした政治勢力の基底構造である地域集団の解明を目的とし、分析を行った。具体的には遺跡分布と副葬土器及び精製土器の地域性を検証した。それらは従来でもイラン鉄器時代文化の変容を説明する際にしばしば研究対象とされてきたが、先行研究は主にイラン西部のザグロス山脈に沿った地域に限られてきた。また、その主眼はおおまかな遺跡の増減傾向と地域性の把握にとどまり、諸遺跡の相互関係等にまで踏み込んだ研究は少数であった。

そうしたなか近年、イラン・日本共同調査団（日本側代表：大津忠彦）による網羅的な踏査によ

り、イラン北部のカスピ海南西岸域において遺跡分布データと豊富な採集土器が得られた。当該地域は従来上記したような分析の対象とはされ難かった。また、イランで本例ほどの高密度な遺跡分布データが得られた例はまれである。そうしたことから、このデータについて新たに各遺跡の時期比定を行ったうえで遺跡分布や土器分布の通時の変化を把握し、領域国家出現を前提とした解釈を行うことで、その成立過程に新たな知見をもたらし得ると考えた。

II. 問題設定と研究の目的

(1) イランにおける鉄器時代の遺跡分布研究

領域国家出現について、本稿と同様に遺跡分布と土器の地域性からアプローチを行った研究例を概観してみたい。

イランの鉄器時代については土器の地域性と遺跡分布の研究が文化変化の指標として積極的に用いられてきた。鉄器時代研究においてこのような視点が重視され始めたのは、イラン北西部（ザグロス山脈北部）におけるハッサンルー・プロジェクトに伴う周辺地域の踏査が嚆矢となっている。ここでは鉄器時代 II 期に遺跡が減少し土器の地域性が増す一方、鉄器時代 III 期に遺跡が増加し、且つ土器が齊一化するとされている（Young1967）。さらにそれより少し南のイラン西部（ハマダーン周辺）でも、同様に鉄器時代 III 期における遺跡の急増が指摘された（Young1967, 1975, 2002）。特筆すべきは、鉄器時代 III 期の遺跡の 61% は鉄器時代 I 期あるいは II 期には居住されていなかったという点である（Young2002: 425）。こうしたことからヤング T. C. Young は鉄器時代 III 期に遺跡分布と土器の地域性双方の画期を見出し、それをメディア王国成立によるものと解釈している。同時に該期の土器の分布域をメディアの直接的な支配領域として解釈している。

それに対しレヴィン L. D. Levine は同様の地域で土器（ware）を更に細分してその分布傾向と遺跡分布の検討を併せて行った（Levine1987）。その結果、鉄器時代 I 期から II 期にかけての遺跡数の相対的減少と III 期での遺跡の急増という傾向についてはヤングの研究成果を支持する一方で、鉄器時代 III 期には遺跡の増加と共に土器も多様化すると指摘し、それぞれの土器分布圏を諸民族や諸勢力の勢力範囲としてとらえた。遺跡の増加を人口増と共に諸勢力の勃興と積極的に結び付けて解釈しているわけである（Levine1987: 242-243）。

以上はイラン北西部における遺跡分布の研究であるが、さらに南のイラン西南部（スシアナ平原）でも同様の検証が行われている。この地域の鉄器時代には既にエラム王国が存在していた。エラムは古エラム、中エラム、新エラムと時期区分されている。中エラムが紀元前 1600 あるいは 1500 から 1000 年、新エラムが紀元前 1000 から 646 年とされており、遺跡分布の分析もこの時期区分に沿って行われている。しかしながら便宜的に中エラム期を鉄器時代 I 期及び II 期、新エラム期を鉄器時代 III 期ととらえても、各時期で遺跡数にはほぼ変化がないことが指摘されている。この地域では鉄器時代を通して遺跡の増減に変化がないと判断できる（Mogahddam and Miri2003）。

さらに南の、ペルセポリス周辺域では北方とは逆に鉄器時代 III 期に遺跡が減少するとされている。この点はアケメネス朝ペルシャ成立過程における画期として多くの研究者が注目しているところではあるが、未だ有力な解釈は提示されていない (Miroshedji2003: Fig3.2; Sumner1986; Young2003: 246)。

このように概観すると、イラン西部においては遺跡分布の通時期的変化に大きな地域差の存在する点が特徴といえる。また、メディアあるいはアケメネス朝が成立する地域においては、①鉄器時代 II 期(並行期)における既存の遺跡の廃絶、②鉄器時代 III 期(並行期)以降の新たな遺跡分布パターンの出現(遺跡の激減や急増を伴う)及び土器の地域性の拡大、③それがメディアやアケメネス朝の成立過程における画期、あるいはそれに伴う現象とされている点は共通している。

(2) 遺跡分布研究の問題点

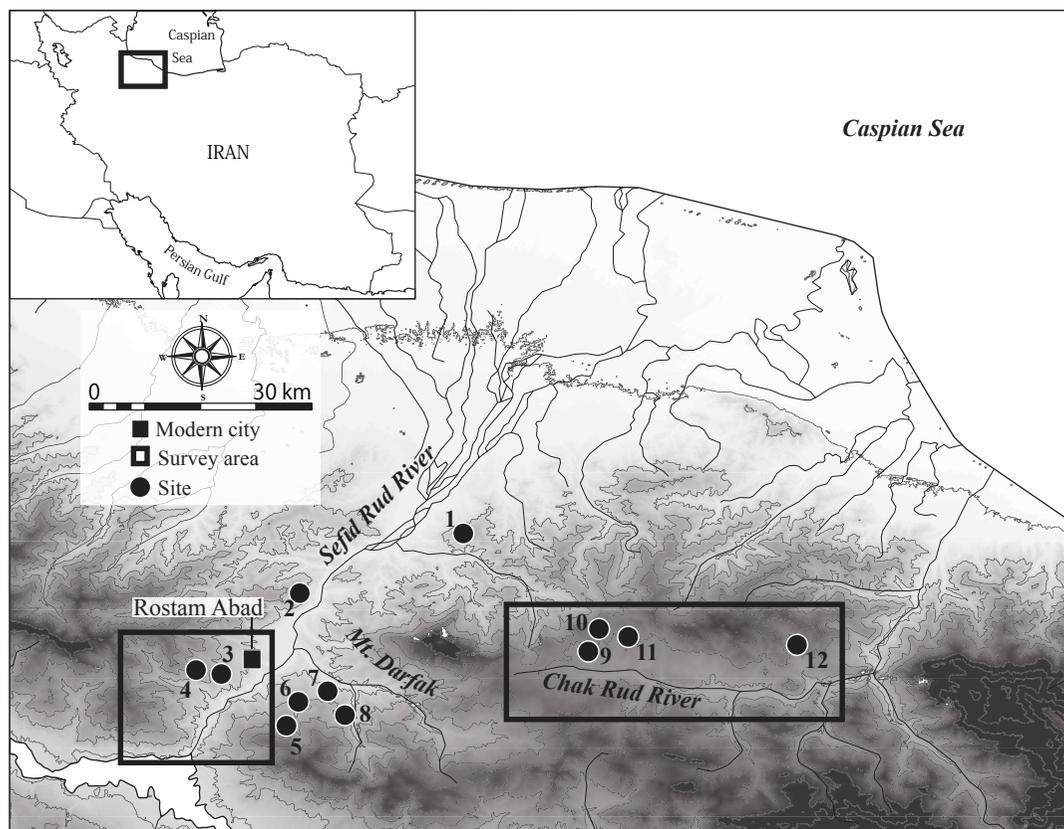
1960年代以降、こうした分析から導かれた見解がイラン鉄器時代文化に対する理解の基本となってきた。しかし分析に際しては分析対象地域がイラン西部のザグロス山脈に沿った地域に限られてきたといえる。また、遺跡分布については相対的に広い範囲での分布調査が主で、対象地域を限定したうえでの網羅的調査が行われた例は少数である。同時に、鉄器時代に関しては全体的な傾向をとらえることに主眼が置かれていた。その結果、遺跡間の機能的、社会的関係や地理条件との対比、よりミクロな地域性の把握といった視点は不足していたといえよう。

また、土器の地域性についても同様の視点の不足が指摘できる。同時に、遺跡分布と同時に検討されることが多いにもかかわらず、土器の地域性は便宜的な対象地域を設定する際に用いられるのみで、遺跡分布傾向との相互関係について探求される例は少ない。

(3) 研究の目的

こうした研究状況の背景にはイラン西部以外で遺跡分布や土器のデータが不足していたということも要因としてあったが、近年、特にイラン北部については踏査や発掘調査、既存の出土資料の再整理などによって同様の分析を行うことが可能になってきた。そこで、本稿ではイラン北部における政治集団の基底構造としての地域集団について、その規模や構造、成立過程を把握したい。従来この地域での国家出現に関する議論は、上記の先行研究に象徴されるような大まかな視点での検証が主であった。対象となる政治勢力の領域の広さゆえとも考えられる。そうした視点もちろん必要ではあるが、いくら広大な領域国家であれ、その実態はいくつもの地域社会、ひいてはその地域社会を構成する地域集団、村落やムラの相互関係の集積のはずである。このような具体的構造の解明もまた、これら勢力や領域国家の理解には不可欠であろう。

本稿ではそういった政治勢力がどのような地域集団の集積に基づいていたのか、多少なりとも具体化することを目的とする。それが、その成立の背景やそれらが形成した国の実態を解明する一助になると考える。また、北方の地域社会という新たな視点から領域国家出現過程についての知見を



1: Lameh Zamin, 2: Jamsid Abad, 3: Tappe Jalaliye, 4: Kaluraz, 5: Ali Karam Bagh, 6: Marlik, 7: Zeinab Bejar, 8: Gheshlagh, 9: Lasulkan, 10: Ghalekuti I, 11: Ghalekuti II, 12: Tomadjan

図1 対象地域と踏査範囲及び発掘調査が行われた対象遺跡

もたらすと同時に、当該地域をイラン鉄器時代史に位置づけることも目的とする。

なお、本稿での「地域集団」とは、葬送慣習、なかでも副葬品として用いられる土器を共有している人々の集まり、として把握する。同時に、副葬土器の共有範囲が「地域集団」の領域を反映しているのとらえるわけである。その論拠については下記の分析方法の項で詳述する。ただし、これが具体的に世帯や村落といったなかのどのレベルの社会集団に対応するかといった判断はあえて本稿の目的としない。

III. 分析の対象と方法

(1) 対象時期

本稿ではメディア王国の出現する鉄器時代 III 期（前 750–550 年）に主眼をおいて論じるが、分析に際しては該期の特徴を明確にするために、鉄器時代 I 期（前 1450–1250 年）と II 期（前

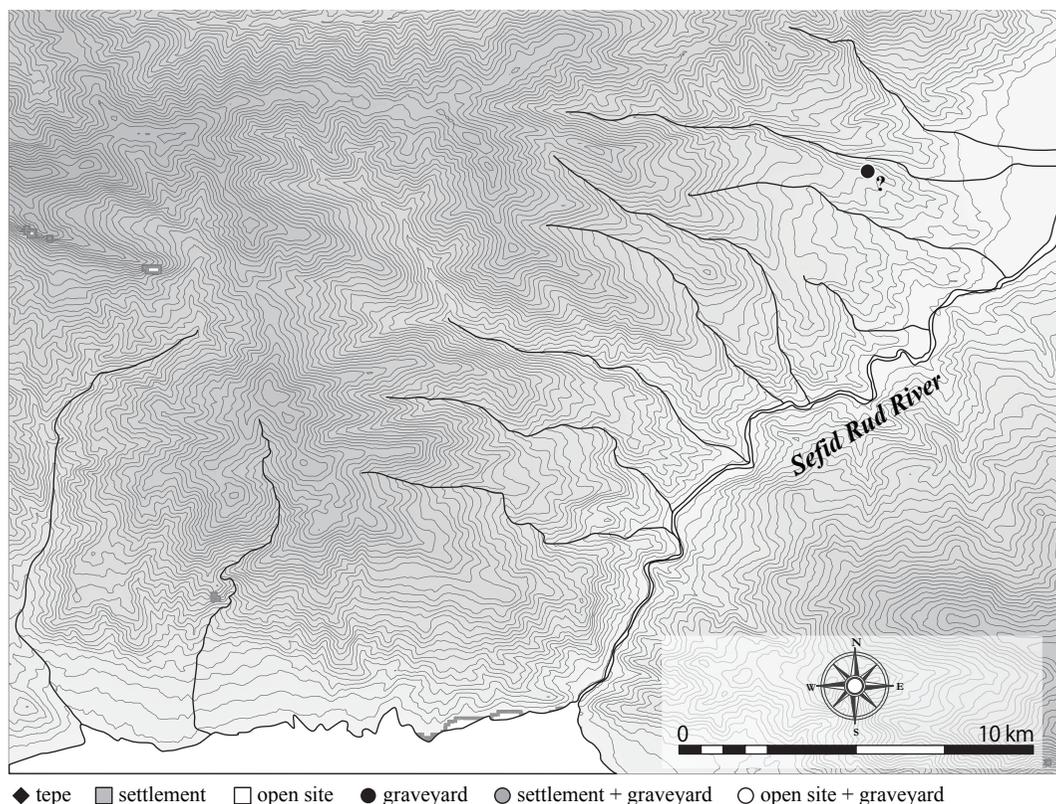


図2 鉄器時代 I 期におけるセフィード・ルード川西岸の遺跡分布

1250-750年)も対象として含めた。各期の傾向を個別に導き通時的に比較検討することで、鉄器時代 III 期にいたる変遷と鉄器時代 III 期における地域集団の特徴を明らかにしたい。

(2) 対象地域

分析の対象とした地域はイラン北部の中でもやや西方で、カスピ海南岸に沿って連なるエルボルズ山脈中に位置する(図1)。今回分析の対象とし得るような遺跡分布が得られているのはセフィード・ルード川 Sefid Rud River 流域と、チャーク・ルード川 Chak Rud River 流域である。この2地域は直線距離ではさほど離れているようには見えないが、実際には標高 2703m のクーヘ・ダルファク山 Mt. Kuh-e Darfak とセフィード・ルード川によって隔てられている。また同時に、①地形、②土壌、③生業といった点についても差異を見出すことができる。①地形。セフィード・ルード川流域は支流が多く、その周囲に緩斜面・平坦面が点在している。チャーク・ルード川流域は標高 1500 m 以上にある高地の盆地状地形で、北側斜面には比較的平坦な地形が広がっている。②土壌堆積。前者ではそうした平坦面には沖積土が堆積しており農耕が可能で、後者では農耕は可能だが沖積土の堆積が薄い。③生業。前者は現在でも耕作地や果樹園として利用されているところが存在

する。後者でも主に麦作などの農耕を行っているが、冬季には降雪量が多く、屋外での生産活動は不可能といわれている。こうした差異は現在の状況から得られた知見によって導かれているが、鉄器時代と極端な乖離はないものと仮定して分析の際に便宜的に用いたい。

(3) 対象遺跡

分析の対象となるのは当該地域で発掘調査あるいは踏査が実施され、鉄器時代に比定された遺跡である(図1)。セフィード・ルード川西岸で把握されている遺跡は128遺跡で、そのうち対象となるのは56遺跡である。そのうち発掘調査が行われたのはタッペ・ジャラリエ Tappe Jalaliye とキャルーラズ Kaluraz、ジャムシード・アーバード Jamsid Abad の3遺跡である。セフィード・ルード川東岸ではマールリーク Marlik とラーメ・ザミン Lameh Zamin、ゲシュラーグ Geshlagh、アリ・キャラム・バグ Ali Karam Bagh、ゼイナブ・ベジャール Zeinab Bejar の5遺跡で発掘調査が行われている。チャーク・ルード川流域で把握されているのは22遺跡で、そのうち対象となるのは11遺跡、発掘調査が行われたのはガレクティ I 号丘 Ghalekuti I、ガレクティ II 号丘 Ghalekuti II、ラスルカン Lasulkan、トマジヤーン Tomadjan の4遺跡である。

このうちセフィード・ルード川西岸の踏査及びタッペ・ジャラリエの発掘調査、キャルーラズ出土資料の資料調査は2000年度から2004年度にかけてイラン・日本共同調査(日本側代表: 大津忠彦)によって実施された(Ohtsu et al. 2003, 2004a, 2004b, 2005, 2006)。また、チャーク・ルード川流域の踏査及びガレクティ I、II 号丘、ラスルカンの発掘調査は1960年から1964年にかけて東京大学イラク・イラン遺跡調査団(団長: 江上波夫)によって実施された(江上編1965; 深井・池田編1971)。

なお、セフィード・ルード川西岸の踏査は非常に網羅的に行われたが、チャーク・ルード川流域の場合はその点が必ずしも保証されないことをお断りしておく。また、いずれの調査でも踏査遺跡についてその規模は記載されていない場合がほとんどのため、その点は発掘調査が行われた遺跡についてのみ、適宜言及する。

(4) 対象資料

分析の中心となる遺物はこうした遺跡から採集及び出土した土器である。そのうち、セフィード・ルード川西岸のタッペ・ジャラリエ出土資料及び踏査が行われた諸遺跡から採集された資料(ギーラーン州考古遺産観光局所蔵)とキャルーラズ出土資料(テヘラーン国立博物館所蔵)、チャーク・ルード川流域出土あるいは採集資料(東京大学総合研究博物館所蔵)は実見することが可能であった。これらについては器形以外の属性に関しても適宜言及する。

(5) 分析方法

本稿では地域集団を土器分布、遺跡分布、自然条件という視点を総合し、把握する。なかでも重

視するのは副葬品として用いられた土器である。「集団がどのような原理によってまとめられているかという、その原理の内容いかんによって、「集団」をとらえるレベルは様々な存在しうる」（鈴木 1974: 70）が、本稿ではその「原理」のなかでも特に社会的集団規制の抽出を目的とするため、社会的機能が重視されていたと想定される遺物を対象とし、分析を行う。本稿は政治集団というあくまで政治的、社会的な組織の基底構造に相当する「レベル」の解明を目的としているからである。社会的機能が重視されている遺物として、具体的には副葬品として用いられた土器を対象とし、地域性を抽出する。そもそも「集団」とは「その集団構成員が他とは区別しうる原理・基準・特徴といったようなものによって組織されている」（鈴木 1974: 70）という前提に立てば、その「原理・基準・特徴」にあたる集団規制の及ぶ範囲が集団領域ということになる。その地域性の及ぶ範囲を本稿での集団領域とみなすわけである。葬送慣習という社会的行為の一端に共通性が見出せれば、それを何らかの社会的集団規制の一貫とみなすことは見当違いではないだろう。上記のような地域集団の定義を行った理由もここにある。分析に際しては採集土器のなかでも副葬品に類例が認められるものについて、既知の副葬土器文化圏（有松 2007）との対比からその検証をおこない、副葬土器分布圏を確定する。

この副葬土器の分布分析は同時に、集団間関係の解明も目的としている。これら土器について地域性をこえた共通性が見出せれば、そこに地域集団間の関係性を想定することが出来る。また、特に鉄器時代 III 期については副葬土器に限らず、この時期に特徴的に分布する精製土器についても同様の視点で分析し、集団間関係を検証する。これについても上記分析と同様、出土状況や諸属性から社会的機能を帯びていたと推定される土器を抽出し、対象とする。それにより、各遺跡、各集団の社会的関連性の検証を行いたい。そうした土器について出土状況や諸属性等からその性格を明らかにしたうえで、分布傾向を明らかにする。

遺跡分布の分析では踏査が集中的に行われた 2 地域を個別に分析し、地域ごとに通時的傾向を見出した後に、相互に比較する。それにより、先行研究では見過されがちであったマイクロな地域性をとらえることができると考えた。具体的には遺跡や遺跡群の地理的位置関係及び相対的位置関係、継続性の把握を目的とする。まず遺跡を機能に基づき分類する。そのうえで調査の精粗によるバイアスを考慮し、遺跡類型別増減率、遺跡の継続率、遺跡の立地に重点をおいた。加えて遺跡分布密度も ArcGIS 9.2 の Spatial Analyst を用いて算出した。その際、検索半径は 15km、出力セルサイズは 100k m²、密度タイプはカーネルに設定した。なお、各遺跡の時期区分については採集及び出土資料を裏見した所見に基づき、独自に行った。各報告書中では鉄器時代の時期区分に沿った遺跡の時期がほとんど明記されていなかったことによる。その際の編年は当該地域の資料をもとに構築したものを用いた（有松 2005; 西秋他 2006: Fig. 3）。このように、今回示す遺跡分布は独自に判断した各遺跡の年代に基づくことを明示しておく。

自然条件についてはそれを無批判に前提とするわけではなく、ひとつの目安として用いる。水系や微地形ごとに遺跡分布及び土器分布に一定の傾向が見出せれば、それをなんらかのまとまりと仮

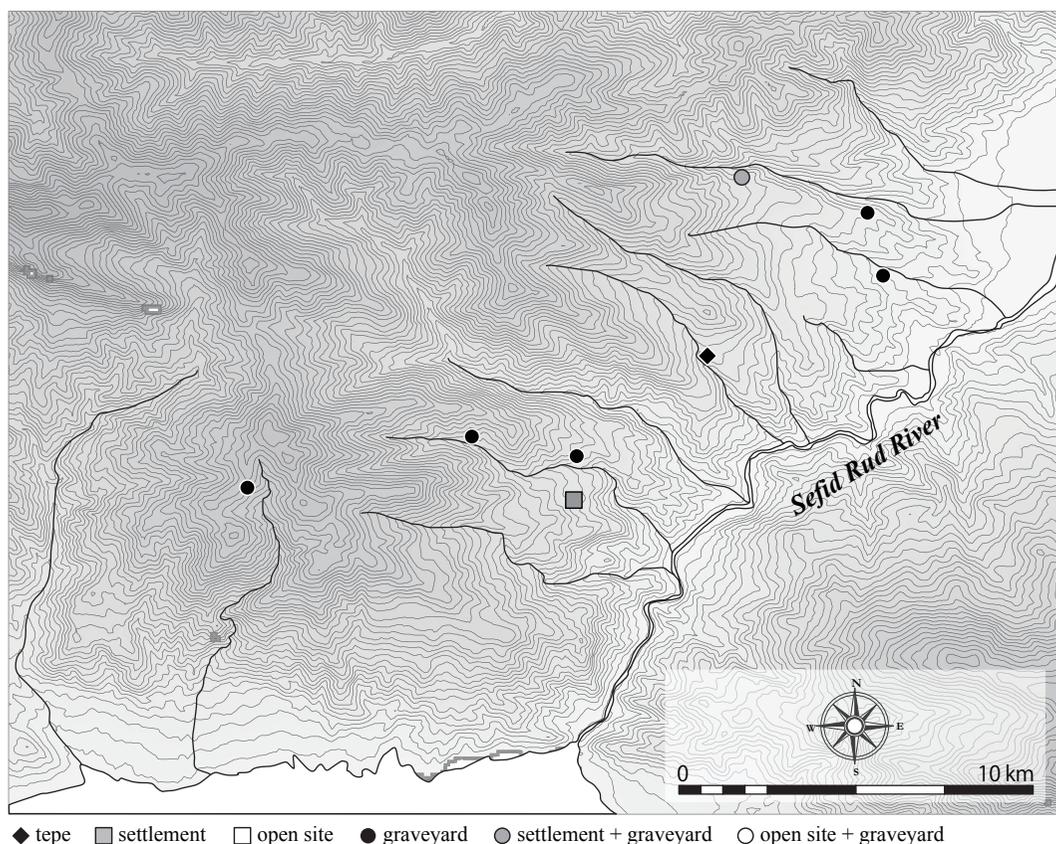


図3 鉄器時代 II 期におけるセフィード・ルード川西岸の遺跡分布

定することはあながちまとはずれではないだろう。対象地域内で踏査が行われた両地域間には前述したような自然条件の差異があり、これら地域を個別に分析し相互に比較することで、おのずこの方法に沿うことになると思う。

IV. 分析 (1) - 遺跡分布 -

(1) 遺跡類型

対象地域において、遺跡は機能的に以下の4種類に分類することができる。ここでは主にセフィード・ルード川西岸でおこなわれた遺跡踏査の際に用いられた分類 (Ohtsu et al. 2003, 2004a, 2004b, 2005, 2006) をもとに区分を行った。また、具体的な遺跡の性格についても基本的に報告書の記載に基づいていることをお断りしておく。

i) テル状遺跡 (tepe)

当該地域ではテル状の遺跡は稀である。現に、発掘調査が行われたのはタッペ・ジャラリエに

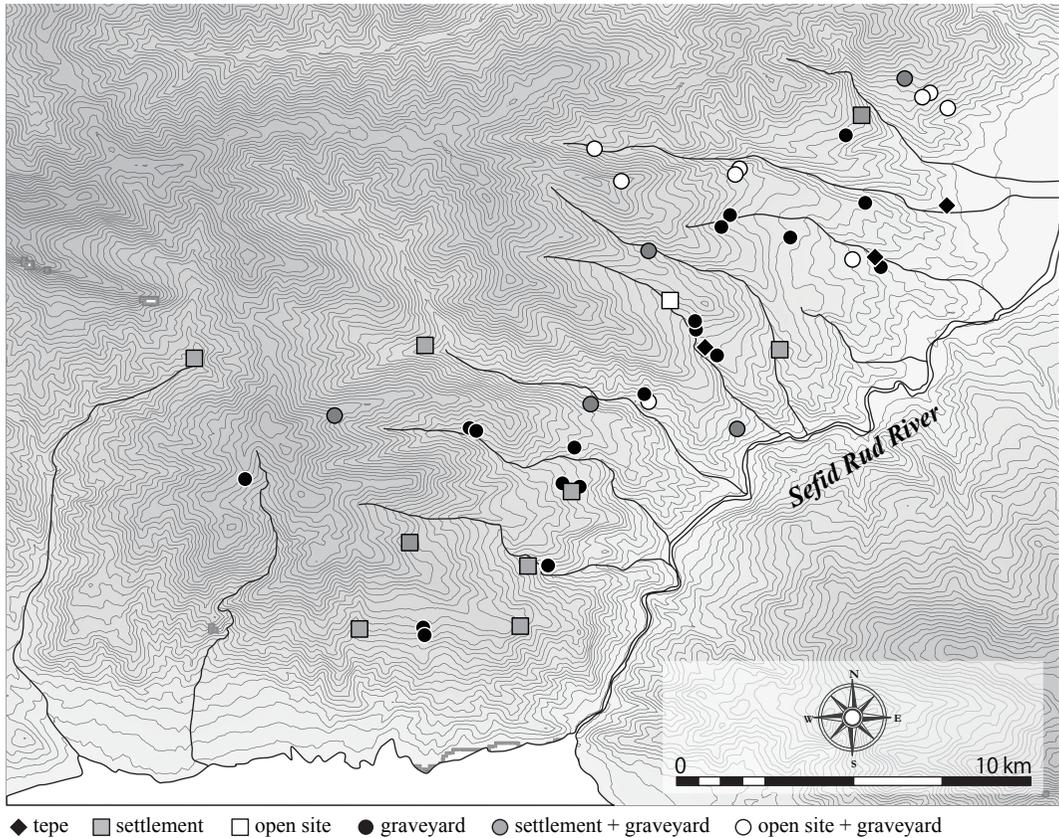


図4 鉄器時代 III 期におけるセフィード・ルード川西岸の遺跡分布

限られ、踏査によっても5遺跡程度が発見されたのみだった。それらも、平地ではなく自然丘の上に形成されたものが多いと考えられる。

ii) 居住遺跡 (open site, settlement)

墓地遺跡に対する、居住スペース。基本的に、墓地遺跡から近距離に設けられていたと考えられる。ただ、当該地域においては、住居址が発掘された例はガレクティ I 号丘とタップ・ジャラリエしか知られていない。そもそも、居住遺跡を発見すること自体困難であった。当該地域では現在の民族例から推測する限り、一般住居は深く堅穴を掘りこむことなどもせず木材で建造されていたと考えられる。そもそも流動的な生活を送っており、定住的な住居を建設しなかった可能性もある。

セフィード・ルード川西岸の調査では報告者は open site と settlement を区分して記述している。本稿もこの地域に関してはその記述に拠って図版等を作成した。ただしその区分の根拠等は明記されていないため、以下の分析中では共に居住遺跡として扱い、必要な場合のみ適宜区分して記載する。

iii) 墓地遺跡 (graveyard)

墓のみで形成されている遺跡。対象地域では圧倒的に数が多い。イラン北部では鉄器時代以降住居址と墓が分離し、墓地が形成されるようになったとされている。墓地遺跡で墓を切るように住居址が検出されることは稀なため、鉄器時代中は墓地遺跡が居住遺跡に転換されるようなことはほとんどなかったようである。基本的に、鉄器時代の墓は住居址よりも標高の高い、小高い台地上に造られることが多い。

iv) 居住遺跡+墓地遺跡 (settlement + graveyard, open site + graveyard)

その性格として open site あるいは settlement と墓地が併記されている遺跡。報告書の記載からは、居住遺跡と墓地遺跡双方は同時期に利用されていたのか、両者の間に居住地とその埋葬地という対応関係が実際あったのかという点について厳密な判断を行うことはできない。以下の分析中では、居住遺跡数や墓地遺跡数を把握する場合等には双方にこのタイプの遺跡を含めて扱った。

(2) セフィード・ルード川西岸における遺跡分布

i) 鉄器時代Ⅰ期 (図2)

該期の遺跡は非常に限られていて、現時点ではジャムシード・アーバードとキャルーラズのみとなる。共に墓地遺跡で、セフィード・ルード川からさほど距離は置かない。キャルーラズは非常に豊富な副葬品で著名だが (Hakemi1968, 1973; Ohtsu et al. 2006)、ジャムシード・アーバードは相対的に副葬品が乏しい墓しか検出されていない (Fallahiyan2004)。キャルーラズが未報告のため断定はできないものの、この2遺跡は規模がだいぶ異なっていた可能性がある。

ii) 鉄器時代Ⅱ期 (図3)

該期になると遺跡数が増加する。墓地遺跡は2遺跡から5遺跡に増加し、セフィード・ルード川に流れ込む支流にも遺跡が点在するようになる。遺跡の分布域が全体的に拡大するといっていよう。前時期においてはセフィード・ルード川の本流に程近い地域に遺跡が限定されていたことから考えると、大きな変化である。また、居住遺跡と判断し得る遺跡が出現するのも大きな特徴といえる。特にテル状遺跡がこの地域ではじめて出現することも特筆すべき点であろう。一方で、前時期に遺構が確認されていたジャムシード・アーバードでは該期の遺構は確認されず、また、キャルーラズでも現時点で該期のものと断定しうるような遺物は確認されていない。

iii) 鉄器時代Ⅲ期 (図4)

該期になると遺跡数は大幅に増加する。墓地遺跡は5遺跡から38遺跡になり、居住遺跡は3遺跡から27遺跡になる。Ⅱ期と比較して遺跡の分布域もやや拡大するし、分布密度も増大する。遺跡は支流の上流にまで広がり、同時に、ミクロな地域差が顕在化する。セフィード・ルード川下流よりの緩斜面を形成する流域では、テルが下流に、上流にオープン・サイトが分布するという傾向がみられる。一方、セフィード・ルード川上流域の流域ではセトルメントと墓地が散在している。遺跡の増大に伴い、あらたな居住パターンが形成されたと考えられる。テル状の遺跡が本格的に出現するのもこの時期と考えられる。テル状遺跡は前時期から存在してはいたが、採集土器から

判断する限り鉄器時代 II 期としても末葉からの出現と考えられる。さらに、鉄器時代 II 期の遺跡は基本的に継続する。

(3) チャーク・ルード川流域における遺跡分布

i) 鉄器時代 I 期 (図 5)

鉄器時代 I 期。該期の遺跡は 6 遺跡で、すべて墓地遺跡である。チャーク・ルード川に沿って分布するが、河岸ではなく河川流域の盆地状地形中を流れる支流に沿った、盆地を囲むやや小高い丘陵上にある。遺跡の規模をみると、少なくともすでに発掘調査が行われたものに関しては比較的大規模に利用されたことが窺える。特にガレクティ I 号丘には整然とした墓域が形成されていたし(江上編 1965: PL. XLI)、トマジヤーンも豊富な遺物で著名な遺跡である (Samadi 1959a; 1959b)。

ii) 鉄器時代 II 期 (図 6)

鉄器時代 II 期。該期の遺跡は 2 遺跡のみで、前時期と比較すると減少傾向にある。同じくすべて墓地遺跡。前時期からの継続が確認できるのはトマジヤーンのみとなる。ただし、ガレクティ I 号丘で該期の遺構が検出されていない一方ガレクティ II 号丘は現時点では該期から利用され始めたと考え、ガレクティ遺跡群全体としてとらえれば、鉄器時代 I から II 期にかけて継続して使用されたといえるかもしれない。いずれにせよ、多くの遺跡が該期になると使用されなくなり、遺跡数が減少するということは指摘できる。

iii) 鉄器時代 III 期 (図 7)

鉄器時代 III 期。該期の遺跡は 8 遺跡で、鉄器時代を通じて最も遺跡数が増加する。分布域全体も多少は拡大するが、分布密度の増加のほうが顕著といえよう。他方、鉄器時代 I 期の状況と比較すると、遺跡の数は増加するものの、遺跡の規模をみると I 期ほど大規模な遺跡は報告されていない。また、分布域が僅かではあるが拡大するので、結局遺跡分布密度自体は I 期とほぼ同程度となる。遺跡の継続性をみると、ブヤ Buya やラスルカン、ガレクティ I 号丘では遺跡の使用が再開する。一方、継続が確認されるのはガレクティ II 号丘のみといえる。ただ、ここでは III 期の資料は表土出土のものにとどまるので、確かなことはいえない。

(4) 地域間の比較 - セフィード・ルード川西岸とチャーク・ルード川流域 - (表 1)

ここでは前項で個別に記述したセフィード・ルード川西岸とチャーク・ルード川流域の様相について比較していきたい。その際、研究方法の項でも述べた各種遺跡の多寡、遺跡間距離、遺跡の立地、遺跡の継続性という視点から比較し、対象地域全体の通時的変遷を把握する。

i) 遺跡類型 (図 8, 9)

セフィード・ルード川西岸では鉄器時代 I 期では墓地遺跡のみだが、鉄器時代 II 期ではテル状遺跡や居住遺跡も出現する。なかでも、当該地域全域で始めて居住遺跡が出現するというのは特筆すべき変化といえよう。鉄器時代 III 期にはさらにその傾向が顕著になり、テベ状遺跡が本格的に

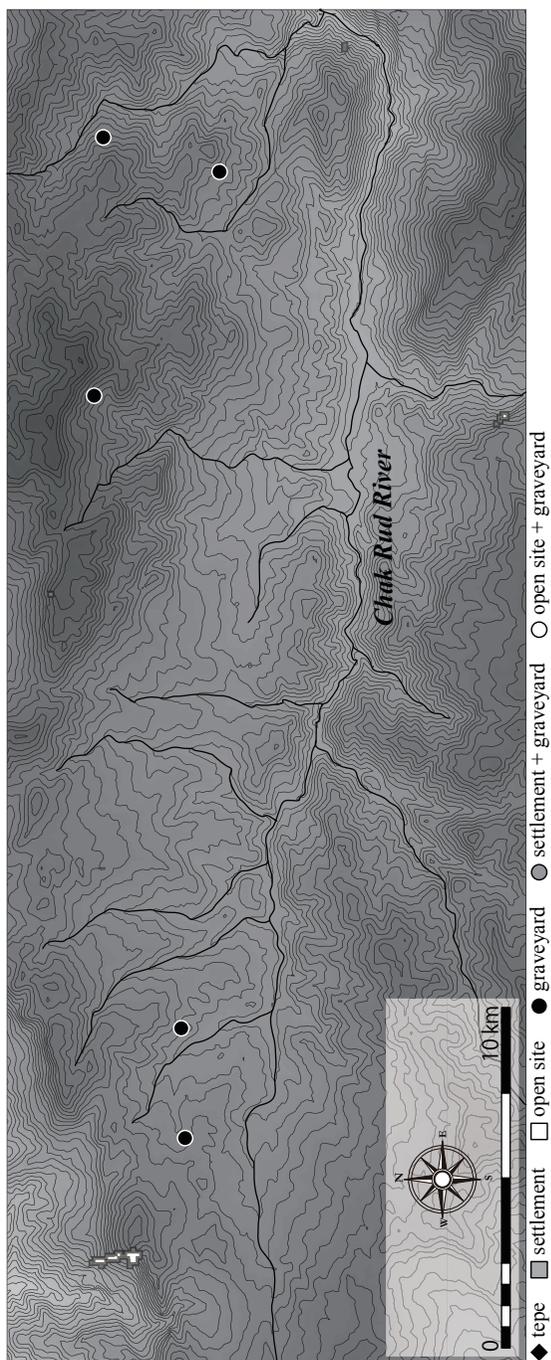


図5 鉄器時代I期におけるチャーク・ルード川流域の遺跡分布

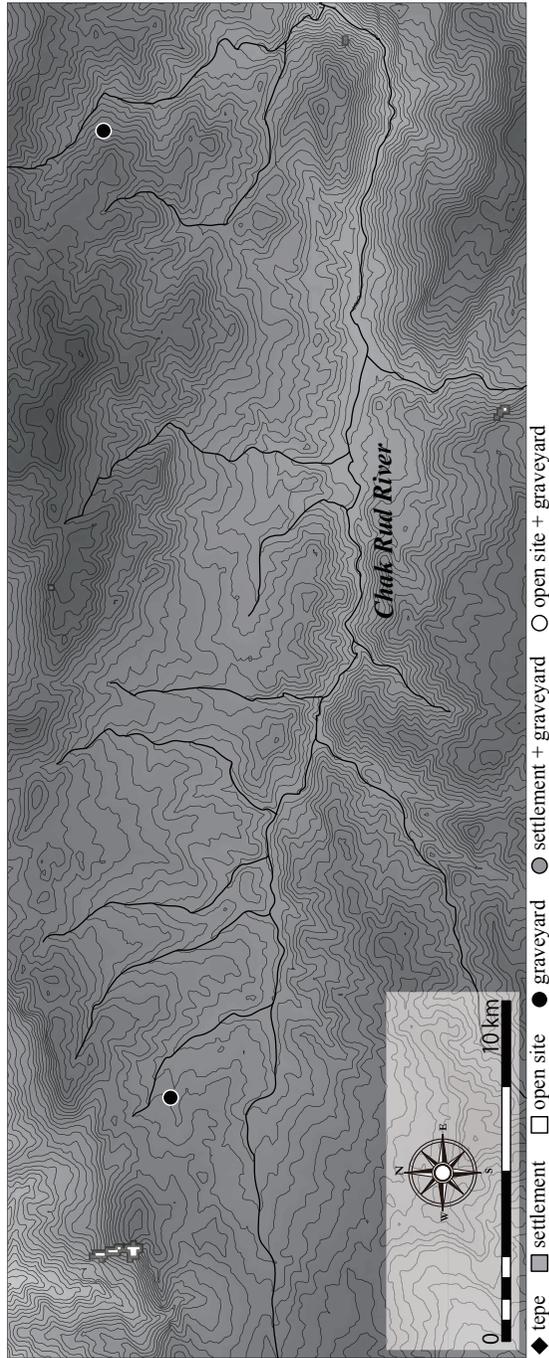


図6 鉄器時代II期におけるチャーク・ルード川流域の遺跡分布

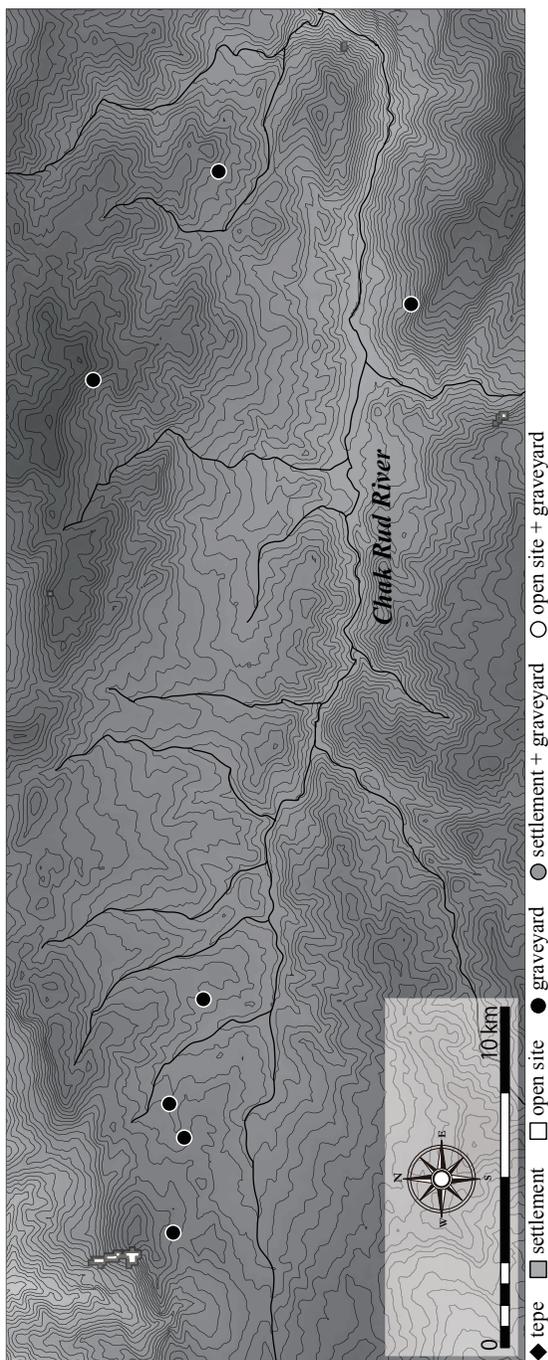


図7 鉄器時代III期におけるチャーク・ルード川流域の遺跡分布

イラン北部における鉄器時代の地域集団とその構造

	対象	Iron I	Iron II	Iron III
遺跡密度 (遺跡数 /100 km ²)	Sefid Rud (全遺跡)	-	4.6	15.9
	Sefid Rud (居住+テル)	-	4.5	9.2
	Sefid Rud (墓地)	-	2.8	12.2
	Chak Rud (墓地)	3.4	1.5	2.1
遺跡数 (前時期比)	Sefid Rud (全遺跡)	-	4.5	7.6
	Sefid Rud (居住+テル)	-	-	9.0
	Sefid Rud (墓地)	-	2.5	7.6
	Chak Rud (墓地)	-	0.3	4.0
遺跡継続率 (%)	Sefid Rud (全遺跡)	0.0	100.0	-
	Chak Rud (墓地)	17.0	50.0	-
新規出現率 (%)	Sefid Rud (全遺跡)	-	100.0	86.8
	Sefid Rud (テル)	-	100.0	66.7
	Sefid Rud (居住)	-	100.0	85.2
	Sefid Rud (墓地)	-	100.0	86.9
	Chak Rud (墓地)	-	50.0	87.5

表1 鉄器時代におけるセフィード・ルード川西岸とチャーク・ルード川流域の遺跡分布比較

出現する。一方、チャーク・ルード川流域では一貫して墓地遺跡のみが確認されている。両地域を比較すると、鉄器時代I期において遺跡が墓地遺跡のみという点は共通しているが、その後の推移は地域ごとに大きく異なる。鉄器時代I期のこうした状況は不自然ではあるものの、少なくともセフィード・ルード川西岸においては網羅的な踏査がなされたにもかかわらず遺跡が発見されなかったことから、実情と受け取るしかない。

ii) 遺跡分布密度

対象地域は山岳地帯のため分布密度を求めることは容易ではない。今回は対象地域を平面的にとらえて導いた数値を採用したが、あくまで便宜的なことをお断りしておく。そのうえで100km²あたりの密度を調べると、セフィード・ルード川西岸では居住遺跡及びテル状遺跡についてはII期で4.5、III期で9.2となる。墓地遺跡も合わせると4.6 から15.9 と変化する。どちらも時期を経るごとに密度が増加していくといえる。一方チャーク・ルード川流域ではI期から順に3.4、1.5、2.1と推移し、II期からIII期にかけて密度は増加するとはいえ、セフィード・ルード川西岸ほどではない。両地域で条件を統一し墓地遺跡のみで比較した場合でも、同様のことがいえる。

iii) 遺跡の立地

セフィード・ルード川西岸では遺跡は流域周辺の台地状地形や平坦部、緩斜面に居住遺跡がある。分布域の変遷をみると流域に沿って、尾根や下流域に遺跡が徐々に広がっていくという傾向がある(図2-4)。さらに鉄器時代III期においては、テル状遺跡は緩斜面が相対的に広く広がる、上流のいくつかの流域に集中している(図4)。同時に、その緩斜面の中でも、中腹あたりのセフィード・ルード川を視野に収める見晴らしの良い台地状地形に形成される。そうしたテルを有す

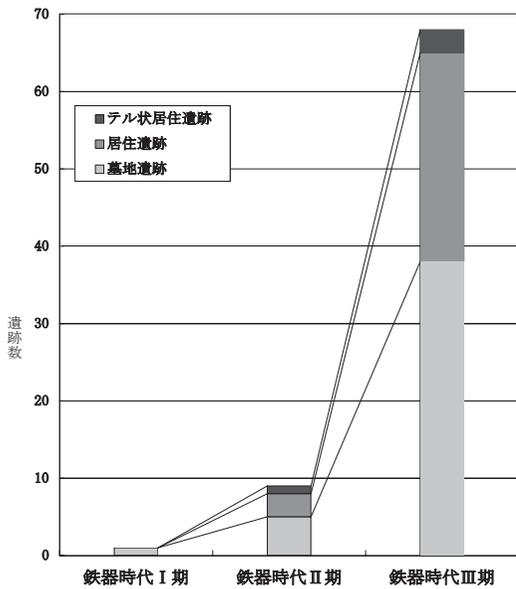


図8 セフィード・ルード川西岸における鉄器時代の遺跡数の変遷

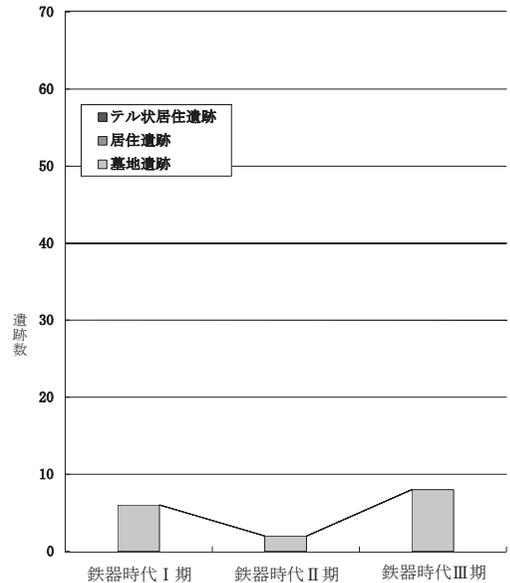


図9 チャーク・ルード川流域における鉄器時代の遺跡数の変遷

る支流では墓地を伴う open site 及び墓地遺跡がテルより上流に発達している。テルを有さない流域では settlement と墓地遺跡が展開する。settlement はこの場合、尾根から下流域までほぼ均等に分布している。このように、セフィード・ルード川西岸内でも遺跡の立地にミクロな地域差が見出せる。他方、チャーク・ルード川流域では墓地遺跡は一貫して、河川からはやや離れた高台の台地上に造られる (図 5-7)。

iv) 遺跡の増減及び継続性 (図 8, 9)

セフィード・ルード川西岸では鉄器時代を通して遺跡分布の増加が著しい。遺跡の総数で見ると鉄器時代 II 期には I 期と比較すると 4.5 倍、III 期には II 期と比較して 7.6 倍になる。遺跡類型別にみると、I 期から II 期にかけて墓地遺跡は 2.5 倍になる。II 期から III 期にかけては、墓地遺跡は 7.6 倍、居住遺跡は 9.0 倍になる。全体として II 期から III 期にかけて大幅に増加するが、特に居住遺跡の増加率が顕著といえる。一方チャーク・ルード川流域では鉄器時代 II 期には墓地遺跡が前時期と比べて 0.3 倍と、減少する。しかし鉄器時代 III 期には逆に、II 期と比べて 4.0 倍に増加する。

遺跡継続率を比較すると、セフィード・ルード川西岸では鉄器時代 I 期から II 期にかけての継続が明白な遺跡は存在しないが、II 期の遺跡はすべて III 期に継続する。同時に、III 期の全遺跡中 86.8% が新規出現と、高い割合を占める。類型別にみると、居住遺跡は 85.2%、テル状遺跡は 66.7%、墓地遺跡は 86.9% が新規出現遺跡となっている。II 期から III 期にかけては遺跡の継続性、

遺跡増加率ともに顕著なことから、各遺跡類型とも新規出現率が著しい。チャーク・ルード川流域ではI期からII期にかけては17%、II期からIII期にかけては50%の遺跡が継続する。同時に、II期の遺跡の50%、III期の遺跡の87.5%が新規出現ということになる。遺跡の継続率はいずれも高くはないが、II期からIII期にかけて継続率及び新規出現率がともに高い数値を示すことはセフィード・ルード川西岸と同様の傾向として指摘できる。

V. 分析 (2) - 土器分布 -

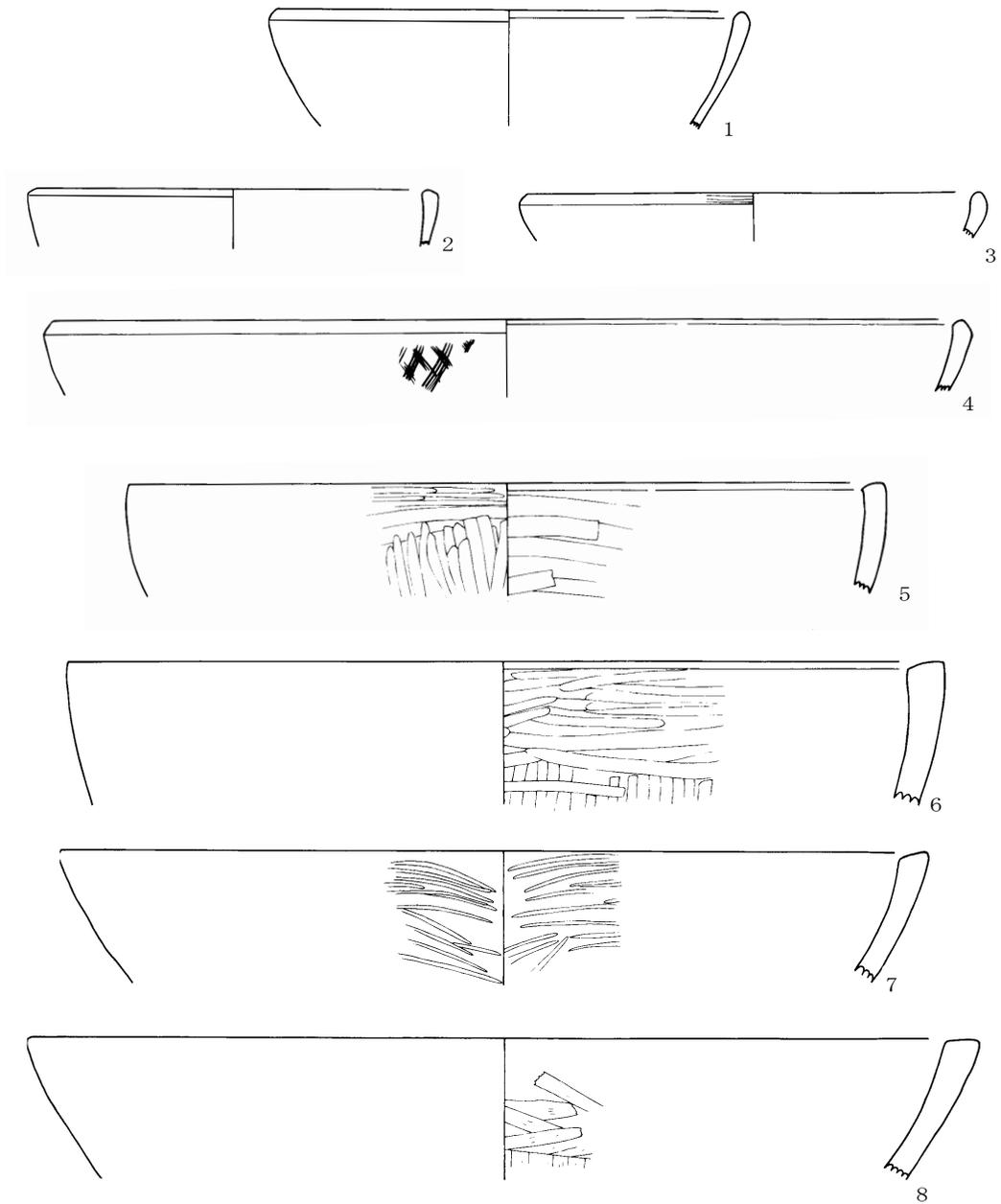
(1) 副葬土器分布圏の変遷 - 採集土器による検証 -

本項では、副葬品として用いられた土器の組成により導いた地域性(有松 2007)を採集土器によって検証する。採集資料を含めることにより、出土資料のみでは分析が十全に行えなかった地域を対象としてより面的で詳細な傾向を把握し得ると考えたためである。また、ここではあくまで葬送慣習における共通性の抽出を目的とするため、採集土器のなかでも副葬品に類例が認められる土器を抽出したうえで、出土資料とあわせて地域性を導きたい。なお、以下文中の器形及び器形以外の属性について記載する際には副葬土器から導いた分類(有松 2007: 図 2、表 1)を用いることとした。

i) 鉄器時代I期

ここで対象とした墓地遺跡はマールリーク (Negahban1996)、アリ・キャラム・バーグ (同)、ジャムシード・アーバード (Fallahiyani2004)、ガレクティI号丘 (江上編 1965; 深井・池田編 1971)、ラスルカン (江上編 1965)、ラーメ・ザミーン (Fukai and Matsutani1978)である。これらを副葬品の土器組成から分類すると、2つのまとまりに大別することができた。具体的には、鉢類と深鉢類、壺類を中心に盤形土器、ゴブレット、形象土器、土偶を有するセフィード・ルード川流域の前者3遺跡と、鉢類、深鉢類、壺類を中心として碗類、盤形土器を有するガレクティI号丘、ラスルカンなどのチャーク・ルード川流域という区分を提示した(有松 2007)。ただし、セフィード・ルード川東岸にあるラーメ・ザミーンはこの双方に特徴的な土器をあわせて副葬しているので、両者の性格を有するということになる(有松 2007)。

両者はクーヘ・ダルファク山を境界とするもので、地理条件にある程度規定されていたと考えられる。本稿での地域区分に沿えば、セフィード・ルード川西岸は前者に、チャーク・ルード川流域は後者に属すということになる。各類型を構成する個々の器形は異なり、例えば鉢類では前者では半球形のもの(Negahban1996: Fig. 26-585, 586)や大きく湾曲して胴部下半に把手が付くものが多く見られる(Fallahiyani2004: 230-11)。後者の場合、鉢類では口縁が「く」の字形に屈曲する大型鉢が特徴的に出土する(江上編 1965: PL. XLIII-19, PL. XLV-7, 8, PL. XLVII-7, PL. LII-20 ~ 23, PL. LXII-17, PL. LXIV-21, 22, PL. LXXIX-204, 205, PL. LXXXI-22, PL. LXXXIII-8 ~ 11, PL. LXXXVIII-2, PL. LXXXIX-5; 深井・池田編 1971: PL. XLVIII-2, PL. LIV-2, 5, 8, PL. LVI-1, PL. LVII-3)。また、同じ半球形の鉢でも高台が付くもの(江上編 1965: PL. XLIII-17,



(1-2: 7-8: Ohtsu et al. 2004 より一部改変、3-6: Ohtsu et al. 2005 より一部改変)



図 10 タッペ・ジャラリエ II、III 層出土資料

イラン北部における鉄器時代の地域集団とその構造

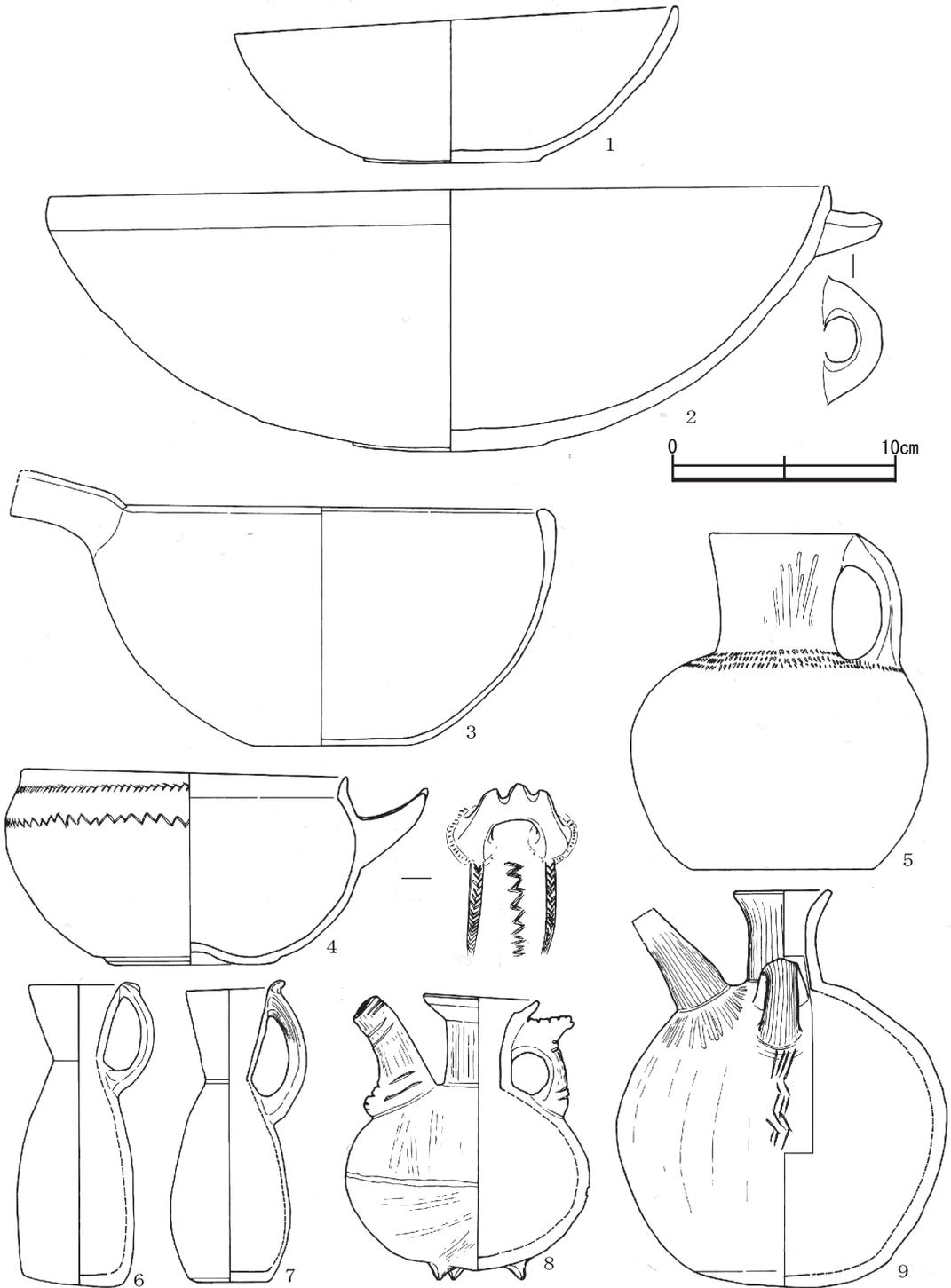


図11 キャルーラズ出土資料(1-9: Ohtsu et al. 2006より一部改変)

PL. XLVII-3, PL. LXII-13; 深井・池田編 1971: PL. LV-4, PL. LVI-2) は後者に特徴的で、前者では出土していない。深鉢類では前者では嘴形注口付土器が多くみられるが (Negahban1996: Fig. 28-608)、後者での出土は限られている。壺類でも前者で多く見られる胴部長楕円あるいは肩部が張った細頸壺 (Negahban1996: Fig. 17-505, 506, Fig. 18, Fig. 19; Fallahiyan 2004: 230-6, 7, 10) や嘴形注口付無頸壺 (Negahban1996: Fig. 25-572, 573, 575, 577, 579; Fallahiyan 2004: 231-18, 19) は後者では1点も出土しない。一方、後者で一般的に見られる丸底短頸壺 (江上編 1965: PL. XLV-5, PL. XLVII-1, PL. LIII-29 ~ 34, PL. LIX-5, PL. LXII-15, PL. LXIV-25, PL. LXXXVIII-4, PL. LXXXIX-3; 深井・池田編 1971: PL. XLVIII-1, PL. LV-1) は前者では少数である。さらに、セフィード・ルード川流域、特にマールリークでは多く出土する形象土器 (Negahban 1996: Fig. 13-84 ~ 99, Fig. 14-106, 113) や土偶 (Negahban1996: Fig. 11-70 ~ 74, Fig. 12-76; Fallahiyan2004: 230-17) がチャーク・ルード川流域では1点も出土しないという点も大きな差異といえよう。

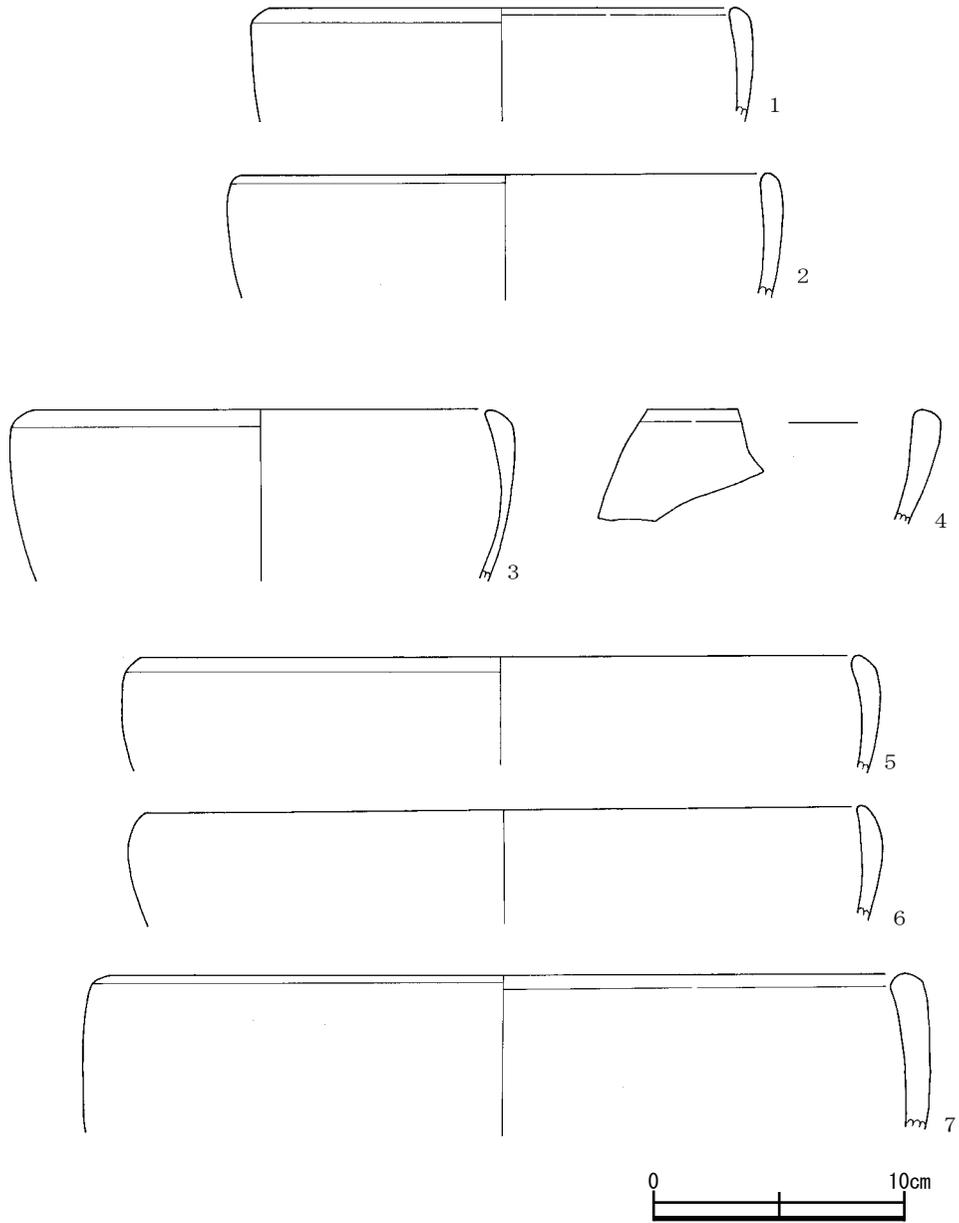
一方、この時期、各地理的単位すべてに共通して見られる器形も存在する。なかでも特徴的なものとしては盤形土器 (Negahban1996: Fig. 29-619 ~ 622; Fallahiyan 2004: 230-12) が挙げられる。また、嘴形注口付土器の中には搬入されたと考えられるほど、器形が一致するものもある (Negahban 1996: Fig. 30-632; 江上編 1965: PL. LII-17)。また、ガレクティ I 号丘から出土する長頸壺のなかでも精製のもの (江上編 1965: PL. LIX-2; 深井・池田編 1971: PL. LI-15) については、器形がマールリーク出土のものとは一致する (Negahban1996: PL. 104-529, 530, 528)。このうち黒褐色精製土器の長頸壺は同様のものがキャルーラズでも出土している (図 11-5)。キャルーラズとデーラマンのこの長頸壺を比較した場合、器形の細部をはじめ胎土や製作技法の細かい点まですべてが共通する点は重要であろう。

こうした出土土器と採集資料とを比較してみたい。チャーク・ルード川流域では、踏査で明らかになった遺跡は4遺跡にとどまる。これらからは口縁が「く」の字形に屈曲する大型鉢 (図 17-1 ~ 4) が多数得られている。一部は高台付であったとも考えられる (図 17-5)。また、深鉢類 (図 17-6) も採集された。基本的にガレクティ I 号丘に類似する土器のみみられるばかりといえる。また、ラーメ・ザミン出土資料に類似する、器壁が直線状の鉢類も採集された (図 18-1, 18-2) ことも、出土資料から指摘したチャーク・ルード川流域における副葬土器の斉一性を支持するととらえられる。一方セフィード・ルード川西岸では踏査によっては I 期に該当する資料は得られていないため、同様の検証は不可能な現状にある。以上より、チャーク・ルード川流域についてのみではあるが、出土資料から導かれた地域性が採集土器によって面的に確認されたといえよう。

ii) 鉄器時代 II 期

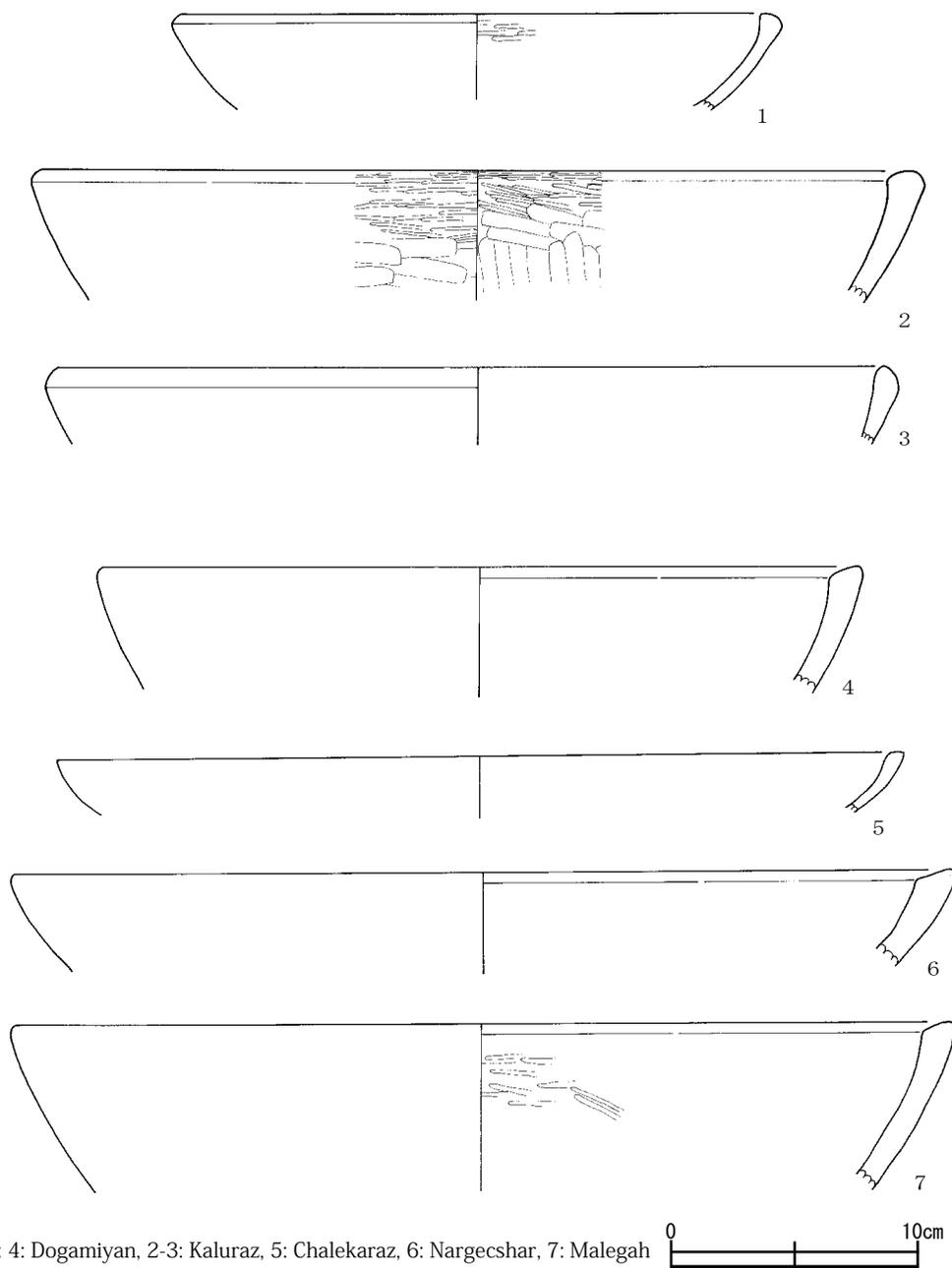
ここではマールリークとゲシュラグ (Negahban1996)、ガレクティ II 号丘 (深井・池田編 1971) を対象とした。この時期のものと断定できる資料は少なく、土器組成を提示することは困難だった。そのなかで、少数ではあるが該期と断定しうる特徴的な土器を比較した場合、大

イラン北部における鉄器時代の地域集団とその構造



1: Kushk Dasht B, 2: Felekash A, 3: Kushk Dasht, 4: Nargeshar, 5-6: Felekash A, 7: Nahr-e Poshte
(2: 5-7: Ohtsu et al. 2006 より一部改変)

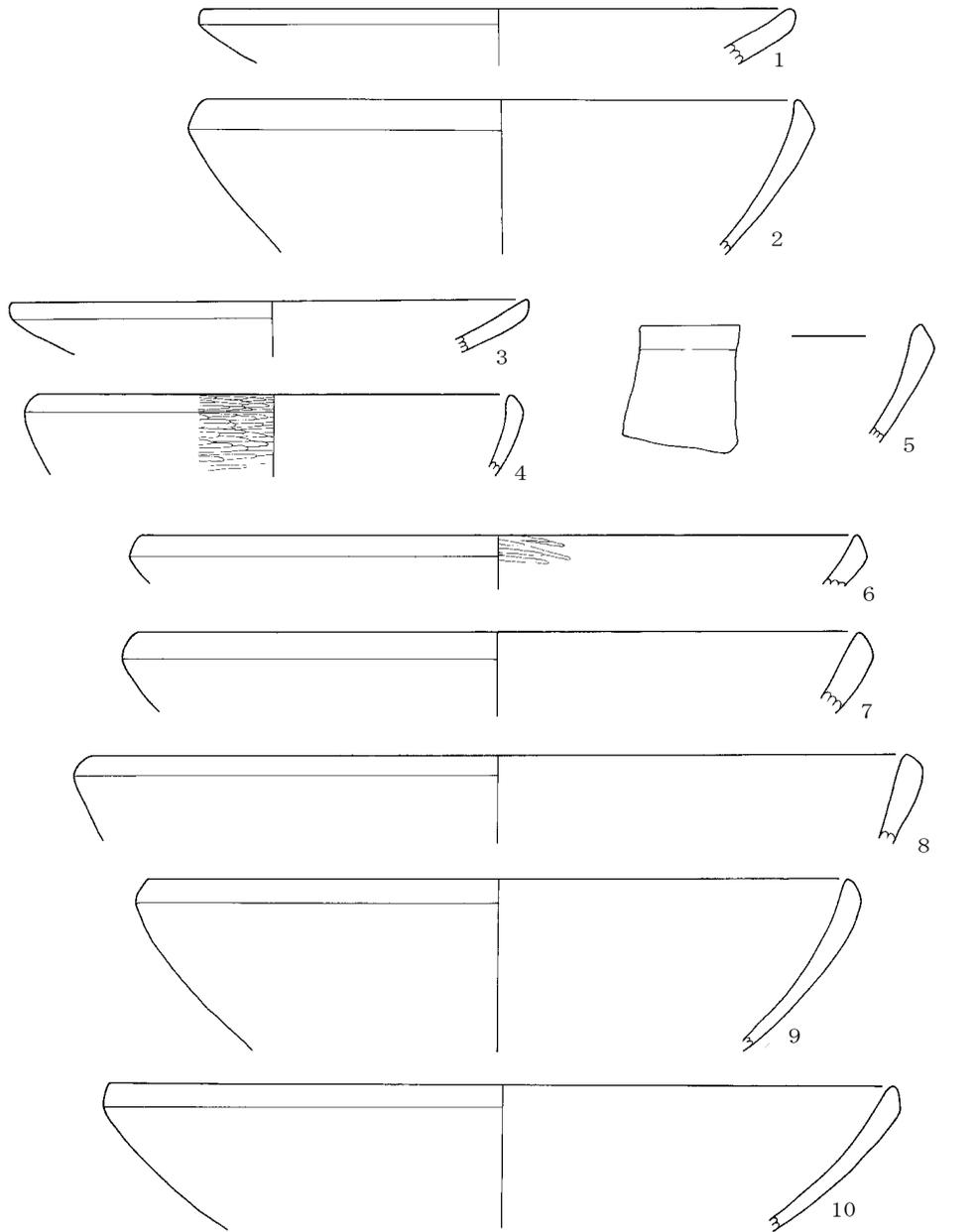
図 12 セフィード・ルード川西岸採集資料



1: 4: Dogamiyan, 2-3: Kaluraz, 5: Chalekaraz, 6: Nargecshar, 7: Malegah
(1: 4: Ohtsu et al. 2006 より一部改変)

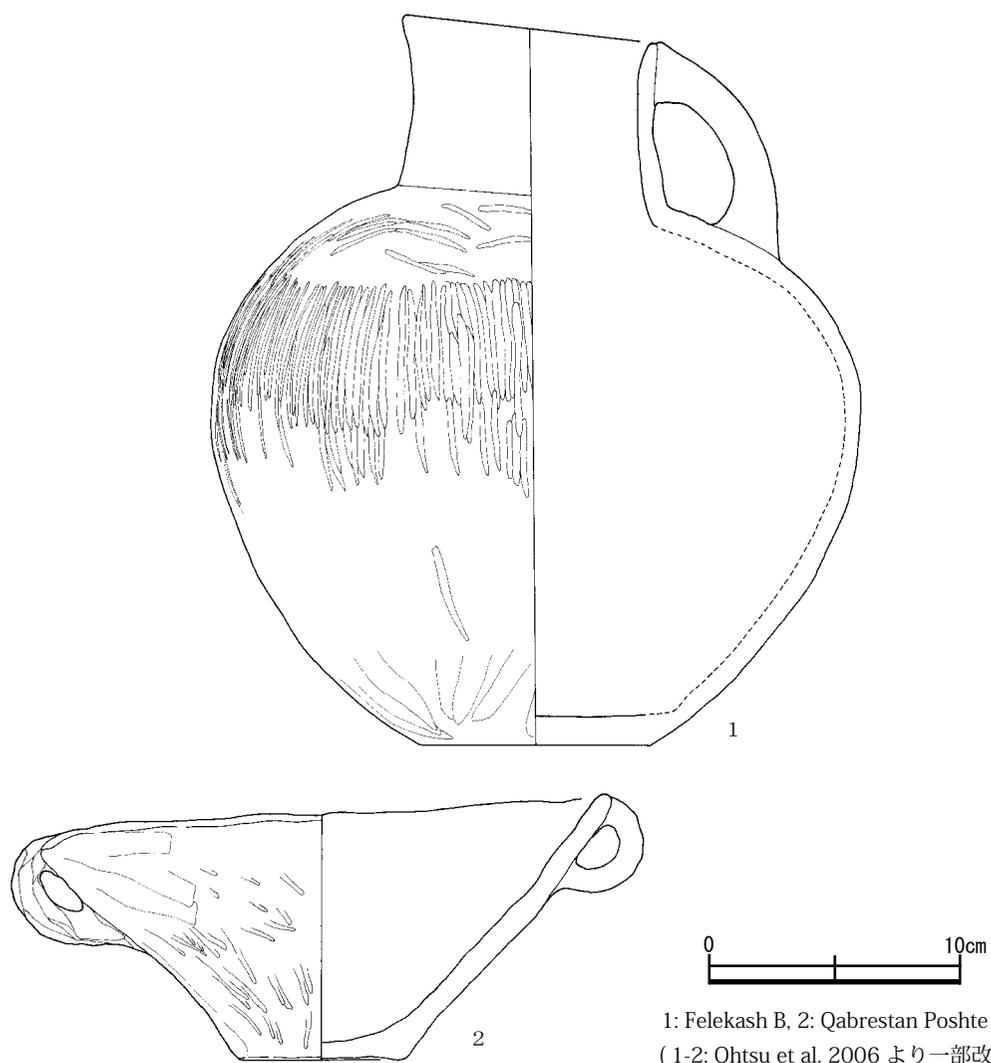
図 13 セフィード・ルード川西岸採集資料

イラン北部における鉄器時代の地域集団とその構造



1: 3: Qabrestan Poshte, 2: Felekash B, 4: Felekash A, 6: Nargecshar,
 7: Marzankash, 8: Felekash A, 9: Felekash B, 10: Bijaron
 (4: 8: Ohtsu et al. 2006 より一部改変、10: Ohtsu et al. 2004b より
 一部改変)

図 14 セフィード・ルード川西岸採集資料



1: Felekash B, 2: Qabrestan Poshte
(1-2: Ohtsu et al. 2006 より一部改変)

図 15 セフィード・ルード川西岸採集資料

きく2つのまとまりを見出すことができた。ブリッジ状嘴形注口付平底短頸壺 (Negahban1996: Fig. 25-578, Plate. 110-582) と把手付平底短頸壺 (同: Fig. 24-571) を有するセフィード・ルード川東岸のマールリック及びゲシュラーグと、壺類と鉢類が中心となるチャーク・ルード川流域のガレクティ II 号丘である。壺類は把手付平底短頸壺 (深井・池田編 1971: PL. XLIV-4, 5) と太頸長頸壺 (同: PL. XLIV-9, 10) で、長頸壺では上部に突起がある把手と注口が付き、把手下部や注口直下に貼付文が施されるようになることが該期の特徴として指摘できる。鉢類 (同: PL. XLIV-13) では鉄器時代 I 期にみられた大型のものが姿を消す。また、非常に粗製の土器が出現

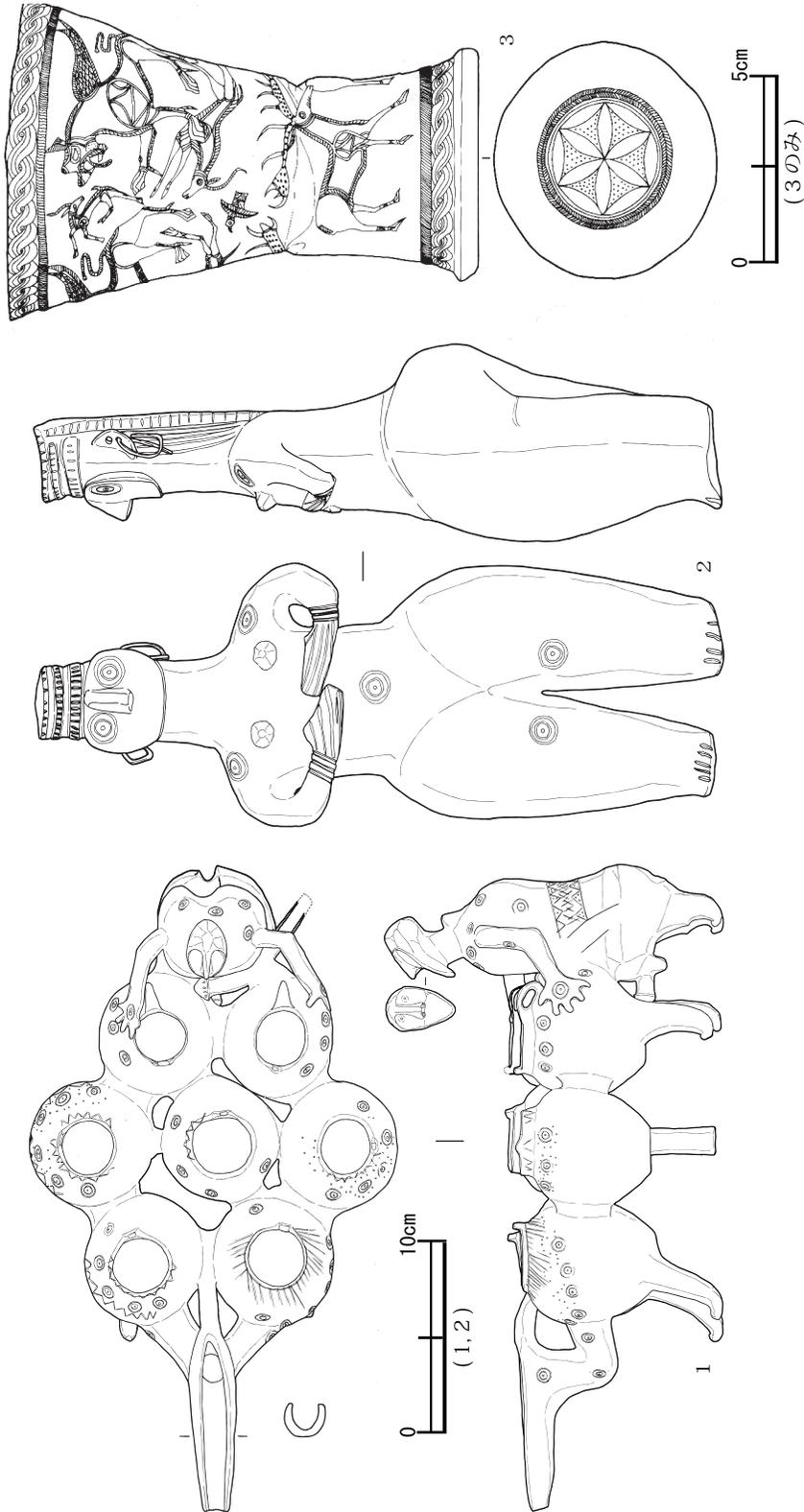
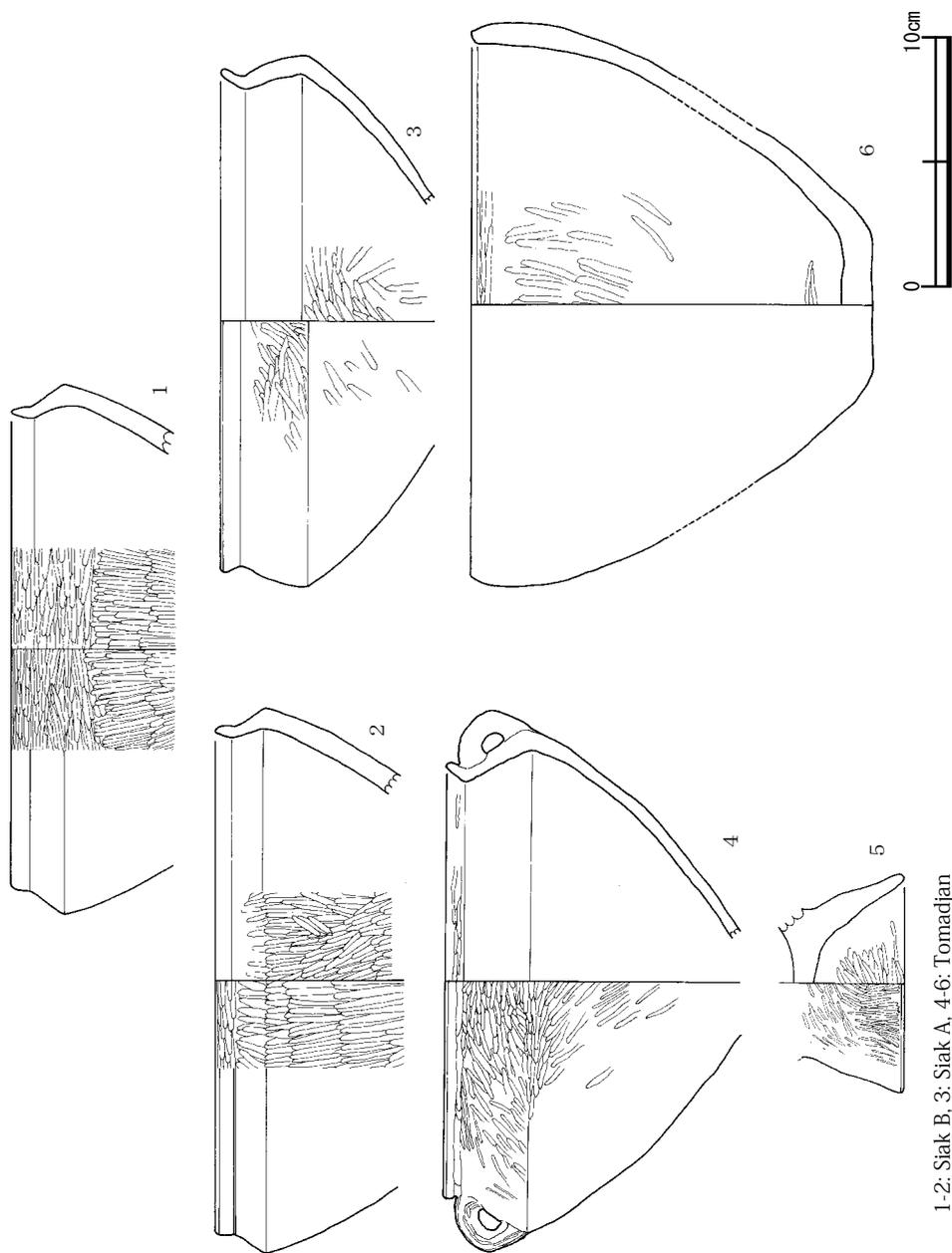


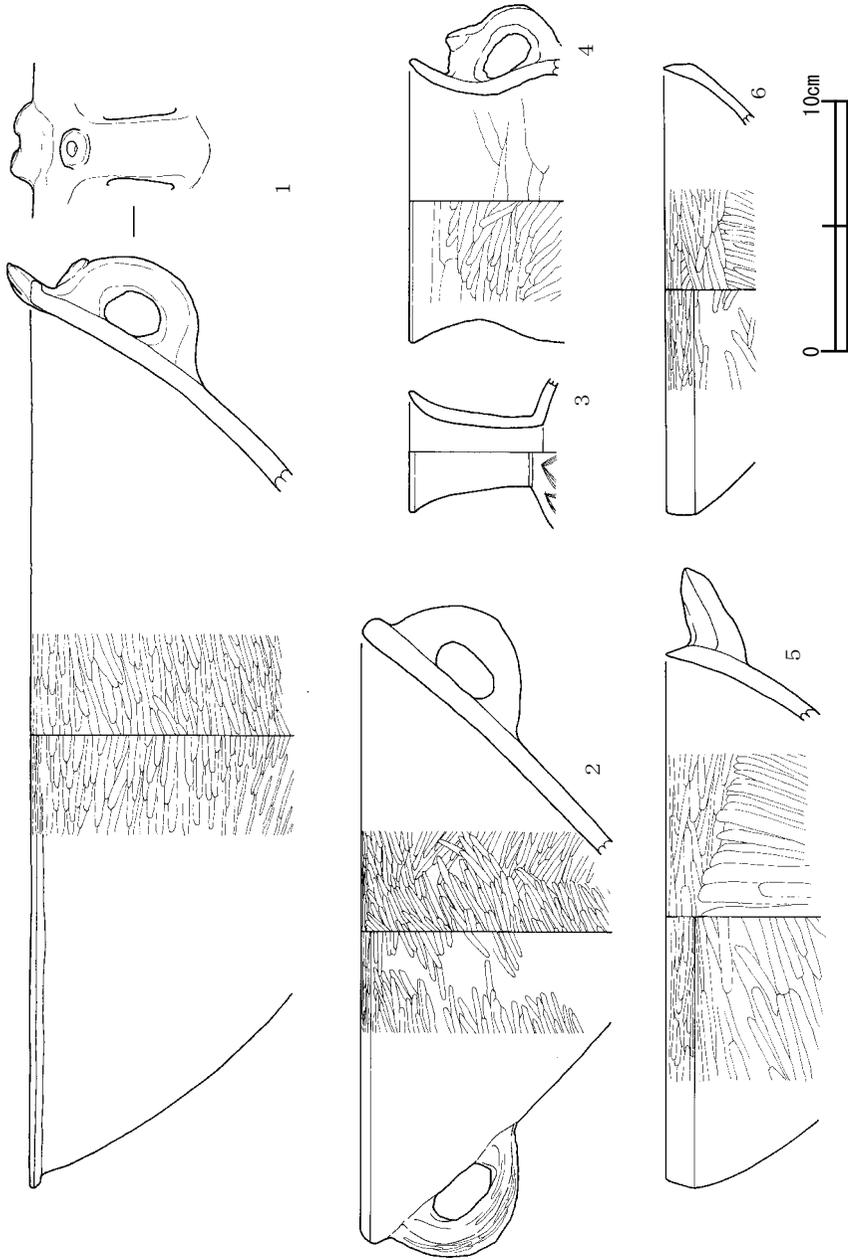
図16 キヤルラーラズ出土土偶、形象土器、金製環

(1-3: Ohtsu et al. 2006 より一部改変)



1-2: Siak B, 3: Siak A, 4-6: Tomadjan

図 17 チャーク・ルード川流域採集資料



1: Tomadjan, 2: Buya, 3: 5: Molameh, 4: Siak A

図 18 チャーク・ルー・ド川流域採集資料

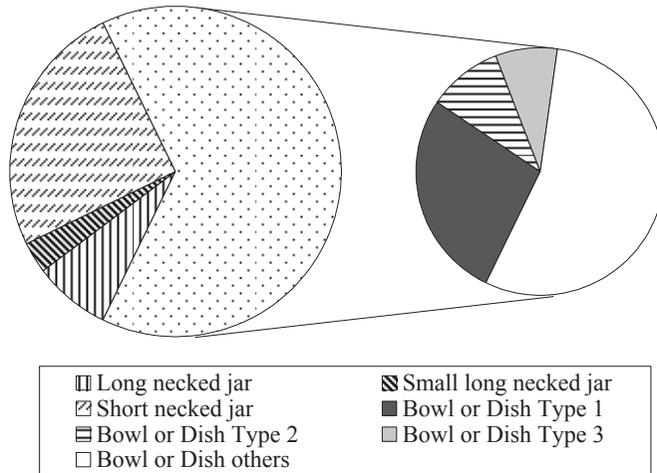


図 19 タッペ・ジャラリエ II 及び III 層出土土器の土器組成

し、調整もほぼナデのみとなることも当該期の特徴といえる。

このように比較すると、規模が縮小したとはいえ、おおまかには前時期でみられた地域性を踏襲するといつてよいだろう。しかし一方で、鉄器時代 I 期でみられたような、双方に共通する特徴的な器形や、搬入されたと考えられるような土器、両者の要素を併せ持つラメ・ザミンのような遺跡を見出すことはできない。このような傾向から、出土資料からは地域性が前時期と比べて高まるのではないかということ指摘した（有松 2007）。

採集土器を加えてみると、出土資料が得られていなかったセフィード・ルード川西岸まで、対象とすることができる。そうすると、基本的には採集土器からも出土資料から導かれたのと同様の地域性が確認できる。チャーク・ルード川流域からは 1 遺跡のみではあるが、上部に突起がある粗製の把手などが採集されている（図 18-4）。一方、セフィード・ルード川流域では 9 遺跡が明らかになっていて、長頸壺（図 15-1）や器壁が直線的な鉢類（図 15-2）などが採集されている。いずれも、チャーク・ルード川流域には確認できない器形と調整といえる。こうしたことから、採集資料からも出土資料でみられた地域性が指示されるといえよう。さらに、採集土器を比較すると、同じ流域でも土器が異なる傾向を示しているように思われる。たとえば前時期のようなセフィード・ルード川流域全体といったようなまとまりを見出すことは現時点ではできない。採集資料からも出土資料でみられた地域性が指示され、且つより地域性が高まったといえる。ただ、この時期は土器の点数自体少数でありまた全体的に全体的に雑な作りのため、確認できた土器が少ないということからそのようにみえるだけなのかもしれない。

iii) 鉄器時代 III 期

対象とした墓地遺跡はマールリークとゼイナブ・ベジャール（Negahban1996）、キャルーラズ（図

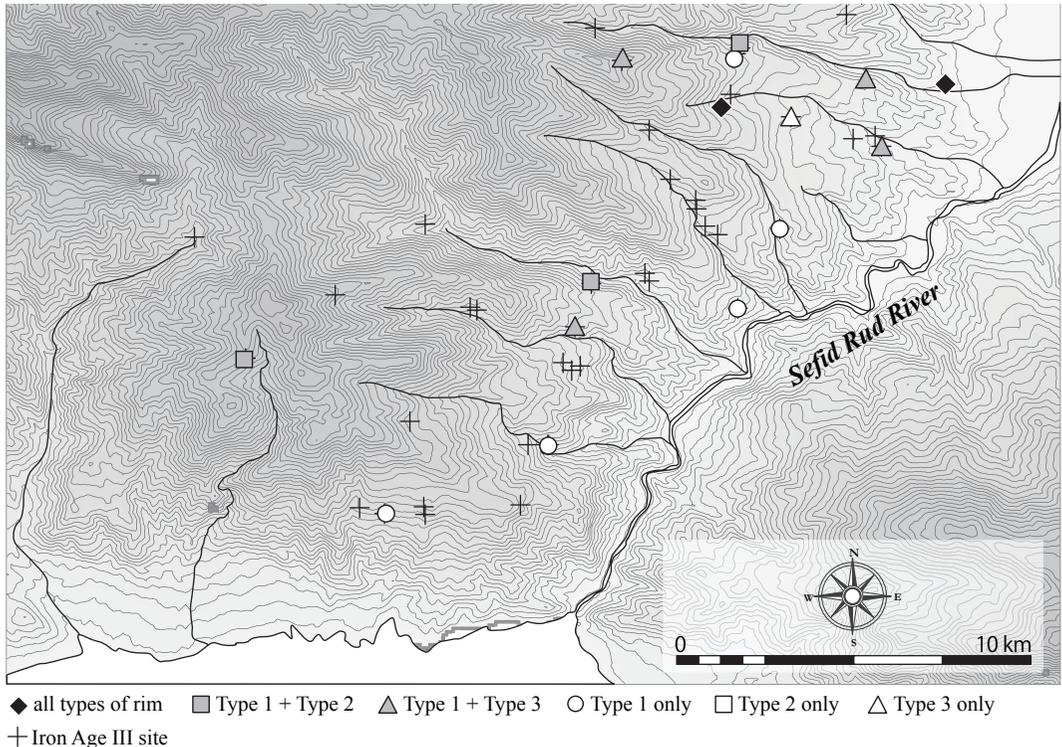


図 20 鉄器時代 III 期におけるセフィード・ルード川西岸の精製土器分布

11)、ガレクティ I 号丘 (江上編 1965) である。

該期の土器組成を比較すると、すべての遺跡の基本的な土器組成が地理条件を越えて共通し、個々の器形も非常に類似することが指摘できた (有松 2007)。土器組成は皿類、壺類、碗類、蓋形土器からなり、壺類と皿類が大部分を占める。なかでも特に共通してみられるのは皿類及び壺類で、これらはいずれの地域でも土器組成のなかで主流をなす。さらに、口縁や底部、把手、装飾の特徴や胎土、成形・整形技法まで一致することが該期の大きな特徴といえる。形態の特徴でいえば、壺類では胴部球形 (Negahban1996: PL. 103-522; 図 11-9; 江上編 1965: PL. LXXIII-2) あるいは洋梨形 (Negahban1996: PL. 101-499; 江上編 1965: PL. LXXIII-1, 3) の細頸壺、長胴壺 (図 11-6, 11-7; 江上編 1965: PL. LXVI-7, PL. LXXIII-10) で、胴部球形のものには注口が付く場合が多い (図 11-9; 江上編 1965: PL. LXVI-9, PL. LXXIII-4 ~ 7, 9)。また、皿類では口縁で断面が三角形を呈するものがどの地域でもみられる (Negahban1996: PL. 111-595, PL. 112-602; 図 11-2; 江上編 1965: PL. LI-1 ~ 3, PL. LXVI-12 ~ 1)。断面三角形の明瞭な稜を有した把手 (図 11-2; 江上編 1965: PL. LXVI-1, PL. LXXIII-2)、ディスク・ベースと称される造り出しによる底部 (図 11-1, 11-2; 江上編 1965: PL. LI-2, PL. LXVI-10, 13)、刻文や、底部や把手の縁の刻み目が多用される。こういった特性は、該期から出現し、地理条件を越えて共通する。土器タイプではこの時期から出

現した明赤褐色精製土器が主流になる（有松 2007：図 3）。

こうした出土資料と採集資料を比較してみると、該期には遺跡が増加するが、増加した遺跡全てから出土あるいは採集された土器に斉一性を見出すことができる。チャーク・ルード流域では 7 遺跡、セフィード・ルード川西岸では 68 遺跡から得られた資料を対象とした。採集土器の基本的な器形は出土資料と共通し、鉢及び皿が多い。上記した明赤褐色精製土器で口縁断面三角形の皿は採集資料の中にもセフィード・ルード川流域（図 14）とチャーク・ルード川流域（図 18-5, 18-6）の双方で特徴的に見られる。土器タイプも、両地域で同様に、ほとんどすべてが明赤褐色精製土器となる。こうしたことから、採集資料からも基本的には出土資料から指摘された斉一性が確認されたといっていよう。当該期に対象地域全体で類似する土器が分布するようになると判断することができる。

(2) 鉄器時代 III 期における精製土器流通圏

前述したように、鉄器時代 III 期になると対象地域全域で副葬される土器が斉一化する。本項ではその斉一性の実態を解明するためにそこでの特徴的な土器に着目し、分布傾向を詳細に検証する。

採集土器を含めてみた場合、なかでもとりわけ広範に、面的に分布する土器にはある程度の共通性が指摘できる。それらは主に鉢類か皿類といった器形で、精緻な明赤褐色の胎土を用い、ミガキなどを多用して入念な器面調整が施された精製土器である。刻文あるいは暗文による幾何学的な装飾が施される場合もある。こうした土器は副葬用に特化していたとは断定できないものの、器形や製作技法、後述するように墓地遺跡に偏って分布するといった点を考慮すれば、葬送慣習関連の祭儀用非日用品という側面を有していたと考えられる。

こうしたことから、この種の土器の分布傾向を検証することで、集団間あるいは遺跡間の社会的関連性をより具体的に明らかにし得ると考えた。

i) 器形分類

そうした土器について分布傾向をより詳細に把握するため、主に口唇部あるいは口縁部形態に基づき以下の 3 種類に分類した。

1 類：口唇部半円頭形（図 12, 13-1 ~ 3）。口唇部が半円頭形を呈するもの。この類型の場合、半円頭形の口唇部と胴部の境に稜が形成され、明確に区分される。口唇部は水平であったり、内傾あるいは外傾したりといった変化がある。鉢類及び皿類に限定される。完形で出土する例をみると、片口形を呈する場合も多い。

2 類：口唇部面取（図 13-4 ~ 7）。口唇部が平坦に面取りされるもの。上記分類と類似する場合があるが、さらに平坦で、丸みを帯びない。平坦面を呈する口唇部とそれより下部には明瞭な稜が形成される。水平であったり、内傾したりするといった変化がある。鉢類及び皿類に限定される。

3 類：口縁部面取（図 14）。口縁外面を大きく面取りしてあり、口縁断面が三角形を呈するもの。口縁部外面を大きく面取りし、胴部との境に明瞭な稜が形成されるもの。皿類にほぼ限定される。

出土例をみると把手が水平に付けられている場合がある。この類型に限っては副葬品にも類例が多い。

ii) 分布傾向 (図 20)

採集土器のなかで、1類(図 12, 13-1～3)および2類(図 13-4～7)の土器は主にセフィード・ルード川西岸からは多数得られている。セフィード・ルード川西岸での分布状況をみてみると、1類が採集される遺跡は全体の 20.6%、2類は 10.3%、3類は 7.4%となる。3類はセフィード・ルード川西岸から採集されるとはいえ、他の2類型よりは相対的に分布する遺跡が少ないといえよう。精製土器の分布傾向についてより詳細にみてみると、これらが採集あるいは出土するのは墓地遺跡か墓地を伴う遺跡に限られる。しかし唯一タッペ・ジャラリエからはこれらが多数採集あるいは出土している点は注目すべきであろう(図 10, 19)。

それに対し、チャーク・ルード川流域では1類や2類が得られた例は極めて限られている。1類の片口形土器がガレクティ I 号丘 C 区 I 号墓上層の副葬品として1点(江上編 1965: P1. LXXIV-17)、またガレクティ II 号丘で表土中から出土した破片程度しか確認できない(深井・池田編 1971: P1. XLIII-12)。チャーク・ルード川流域で採集あるいは出土するのは3類が多い(図 18-5, 18-6; 江上編 1965: PL. LI-1～3, PL. LXVI-12～1)。3類は該期のほぼすべての遺跡に分布するのである。

地域ごとの比較からはこのような地域差が指摘できる一方で、類型ごとにセフィード・ルード川西岸での分布をより詳細に比較した場合にはまた別の傾向がみられる(図 20)。1類と2類は採集率こそ異なるが、分布範囲は大体同様といえる。ともに対象地域全域に分布する。対して、3類は限られた地域から出土あるいは採集されるということがいえる。その地域とはセフィード・ルード川下流の緩斜面域で、そこではテペ状遺跡が集中してみられる点も特徴といえよう。3類型をまとめてみた場合、最低1類型でも採集された遺跡は各支流1遺跡程度にとどまる場合が多い。しかし、対象地域内でも前述した3類の採集率が高い地域の各水系では、複数の遺跡でこれら土器が採集されている。同時に、すべての類型がまんべんなく分布し、3種類すべてが得られた遺跡が立地するのはこの地域に限られる。

VI. 分析結果

(1) 遺跡分布

鉄器時代 I 期には、遺跡分布ではセフィード・ルード西岸に遺跡が極端に少ない一方、それほど網羅的な調査が行われていないチャーク・ルード流域では複数の遺跡が存在するというように、二つの地域で遺跡分布の傾向が全く異なる。また、遺跡数ばかりではなく遺跡が分布する範囲も異なっている。セフィード・ルード川西岸では本流の近辺でしか遺跡が発見されない一方、チャーク・ルード川流域では盆地状地形や支流に沿って広い範囲に遺跡が分布する。一方で、墓地遺跡しか確認で

きないという点は両地域で共通する特徴といえよう。

鉄器時代 II 期になると、セフィード・ルード西岸に居住遺跡を含む遺跡群が出現する。一方、チャーク・ルード流域では遺跡が断絶する。皆無になるわけではないが、遺跡数は減少するし、墓地遺跡のみで構成される。セフィード・ルード川西岸で遺跡が急増して支流域にまで分布範囲が拡大し、当該地域ではじめての居住遺跡が出現することと比較すると対照的な様相といえよう。ここでも地域間で遺跡分布の傾向に大きな違いが存在する。

それが鉄器時代 III 期になると、特にセフィード・ルード川西岸で遺跡が急増し、また、チャーク・ルード流域でも遺跡が増加する。全体的に遺跡が増加傾向にあるとはいえる。しかし、その遺跡の増加は、特にセフィード・ルード川流域においては特異な様相をみせる。分布域が拡大し支流の上流付近にまで達するばかりでなく、分布密度の増加も著しい。また、そうした現象と同時に、各支流といった単位のマイクロな地域差が顕在化する。支流域を基本単位とする新たな居住パターンが形成されたようである。一方、チャーク・ルード川流域で遺跡が増加するといっても鉄器時代 I 期にみられた様相とさほど変わらない程度にとどまる。以上より、鉄器時代 III 期にセフィード・ルード川西岸で遺跡が急増することが明らかになった。

チャーク・ルード川流域では鉄器時代 I 期の遺跡が複数存在し、その後も遺跡の増減にとりたてて大きな変化は見られない。一方セフィード・ルード川西岸では鉄器時代 I 期の遺跡は非常に限られていて、遺跡が本格的に出現するのは II 期以降といえる。このように、鉄器時代 II 期までは常に遺跡分布の傾向が地域間で異なる。鉄器時代 III 期には地域間の遺跡分布の傾向がとりわけ異なった様相を呈する。セフィード・ルード川西岸では遺跡の分布密度が急増し新たな居住パターンが出現するのに対して、チャーク・ルード川流域ではそのような変化は認められない。こうしたことから、今回の分析によってカスピ海南西岸域、特にセフィード・ルード川西岸においては、おそらくは地理条件と気候条件に左右されつつも、対象地域全体で II 期から III 期にかけて遺跡が増加するという画期が見出すことができよう。

(2) 土器分布

今回の分析により、採集土器によっても副葬土器の地域性が再確認された。それによれば、鉄器時代 I 期及び II 期では今回対象としたセフィード・ルード川西岸とチャーク・ルード川流域は異なる土器文化圏に属する。特に鉄器時代 II 期ではその地域性が増すと考えられる。それが鉄器時代 III 期になると、両地域で同様の土器が副葬されるようになる。他方、遺跡分布は鉄器時代を通して両地域で異なる傾向を呈することから、鉄器時代 III 期には同一の土器文化圏でも遺跡分布の傾向が異なっていたととらえられる。

また、特に鉄器時代 III 期について特徴的に分布する精製の皿及び鉢類を 3 類型に分類し、個々に分布傾向を検証した。その結果、これらはタッペ・ジャラリエ以外ではすべて墓地遺跡や墓地を伴う遺跡から採集あるいは出土していることが明らかになった。一方で、類型ごとにセフィード・

ルード川西岸とチャーク・ルード川流域で、あるいはセフィード・ルード川西岸内でも各支流流域で採集あるいは出土頻度や分布傾向が異なること、同時に、すべての類型が偏在する地域や遺跡の存在が明らかになった。

VII. 考察—遺跡分布と土器分布の相互検証—

(1) カスピ海南西岸域における鉄器時代の地域集団

i) 通時的変遷

分析の結果、遺跡分布と土器分布ともに鉄器時代 II 期から III 期にかけての時期に画期があるといえよう。特にセフィード・ルード川西岸ではこの時期、遺跡の分布密度が急増する。とりわけ居住遺跡の増加という質的な面での変化は特筆に価しよう。新規遺跡の出現率はチャーク・ルード川流域でも同程度だが、こちらの地域では遺跡の分布密度や遺跡数といった点では I 期に戻った程度ともとらえられる。両地域を比較すると、この時期遺跡数が増加するという点自体は共通しているが、その具体的な性格は異なっているといえよう。同時に、同地域内での I 期から II 期にかけての変化とも異質なものと考えられる。

こうした画期に着目しながら、北イランの一地域社会における地域集団の様相を通時的に検証してみたい。まず、鉄器時代 I 期には地理条件によってある程度規定されて、対象地域内に複数の異なった地域集団が展開していた。比較対象とした両地域の地理条件に加え自然条件の差異も考慮すれば、該期の集団のあり方は生業形態によっても規定されていたのかもしれない。副葬土器からみれば、両者は一定の交流こそあれ、相互に排他的であった。

鉄器時代 II 期についても同様に副葬土器や採集土器のあり方が地域集団の領域を反映しているのとらえるならば、前時期と比較してより小規模な集団のあり方を想定すべきであろう。前時期では流域や盆地といった単位での集団領域が想定されるのに対し、該期はさらに細分された様相となっている。そうした点を考慮すれば、該期の集団のあり方は相対的に可塑性、流動性が高くなったともとらえられる。一方、遺跡分布に着目すると、セフィード・ルード川西岸では居住を伴う遺跡は相互に一定の距離を保ち、流域も異にして分布している。諸遺跡の相対的位置関係からは、これらを中心とする周囲の墓地遺跡も含めた遺跡群を個別に抽出することは可能である。そうなれば、複数の地域集団が想定できる。また、居住遺跡についても厳密にはテル及びセトルメントと性格を異にしていることから、有機的に関連しあっていたと考えるほうが自然だろう。しかし、副葬品や採集土器からはそのような側面は検証できない。

対して、鉄器時代 III 期における採集土器も含めた土器の斉一化は、I 期における様相、すなわち地理条件により規定されていた生業形態を異にする既存の排他的地域集団が統合され、ひとつの地域社会を構成したととらえられる。対象地域全体を包括する大規模な地域集団の形成、それに伴う生活圏自体の拡大も想定できよう。またその背景としては、II 期における可塑性の高い遺跡群

の乱立という様相を指摘したい。

ii) メディア王国並行期の地域集団

本項では鉄器時代 III 期すなわちメディア王国並行期の様相について、もう少し詳しく見てみたい。前述した状況をより詳細に検討してみると、この時期、副葬土器斉一化の一方で遺跡分布の傾向は地域ごとに大きく異なる。また、斉一化するとした土器についても、厳密にみれば副葬土器、精製土器の分布は普遍的ではない。その地域性や分布の偏向は、チャーク・ルード川流域とセフィード・ルード川西岸、後者のなかでも更に支流域ごと、といったように地理条件によって規定されている。その意味では、前時期までの遺跡分布および副葬土器の地域性を踏襲している側面もあるといえよう。また、こうした地域性を考慮すると、該期の斉一化は必ずしも集団領域自体が拡大したとは限らない。むしろ複数の地域集団間関係の強化、すなわち包括的交流網の構築ととらえられる。

では、ここでの関係の強化とは、どのような性格のものだったのだろうか。その象徴として分析対象とした、両地域に共通してみられる特殊な精製皿類あるいは鉢類の分布からみると、その交流網のセンターは該期に増加するテル状遺跡と、それを中心とするセフィード・ルード川西岸下流に広がる緩斜面域であったと推測される。この地域でのみそうした特殊精製土器の 3 種類全てが出土しているし、それを形成する支流域にある墓地遺跡ではそれらの採集率が高いことから、そのように考えられる。

そういった点を考慮しながら、発掘調査が行われたタッペ・ジャラリエとその墓地とされるキャルーラズについて具体的様相をみてみたい。タッペ・ジャラリエを含むキャルーラズはその立地や規模からキャルーラズ渓谷の拠点であったとも推定されている（山内 2006: 27）。さらに金属の精錬や土器の生産を行っていた可能性から、経済的にも繁栄していたとも考えられている（同: 28）。本稿の分析でも、タッペ・ジャラリエからは分類した精製土器 3 種類がすべて採集されていることが明らかになったし、そもそも墓地遺跡以外で唯一、この種の精製土器が採集されている遺跡である。また、キャルーラズに関しても他の遺跡とは多少異なった点が見られる。キャルーラズから出土するような大型且精緻な土偶類（図 16-1, 16-2）は該期の他の遺跡からは出土しておらず、また、土器も他の遺跡と比較して同様の器形でもとりわけ大型であったり（図 11-2）、装飾的要素が強かったりする（図 11-4, 11-8）点が特徴といえる。また、時期判断には注意を要するが、線刻と敲き出しによって文様が施された金製杯のような奢侈品が豊富な点も著名である（図 16-3）。そうしたことから、セフィード・ルード川西岸、特にタッペ・ジャラリエに居住した人々がこの時期当該地域において特別な役割を一手に担っていたのではないかと推測される。

また、チャーク・ルード川流域と比較して分布密度の急増や居住遺跡の急増といった特徴が顕著なことから、鉄器時代 I 期とは異なり、セフィード・ルード川西岸が集約的に生活拠点として利用されていく様子が窺える。これは、墓地の様相から推定した、当該地域のセンターが鉄器時代 I 期にはチャーク・ルード川流域ではガレクティ I 号丘、セフィード・ルード東岸のマーリークが両立していた状態から、III 期にはセフィード・ルード川西岸のキャルーラズへと一極化し、移行し

ていくととらえた様相と矛盾しない。

一方で、セフィード・ルード川西岸についてはテルや居住遺跡を中心としたあり方は II 期でも同様といえる。それらも相互に交流があった可能性は否定できない。また両時期の遺跡分布の傾向についてはいくつかの点で継続性が見出せることは前項で指摘した。そのように考えると、III 期の特徴としては副葬品及び特殊精製土器群の画一化及びそれらの特定墓地や地域への偏向埋納といった現象が挙げられる。これはすなわち、特定の地域集団あるいはこうした交流網への帰属意識の顕在化としてとらえられないだろうか。そうなれば同時に、その背景には交流網を維持することで現実的な利権を求める上位構造の存在が示唆されよう。

交流網の表象としてとらえた特殊精製土器は、その器形や属性、出土あるいは採集状況を考慮すると、あきらかに非日用で、具体的には葬送慣習関連の祭祀用製品として用いられたと判断できる。そのため、その分布と地域性から導かれる集団規制及び集団間の関係とは、そうした祭儀の画一化を背景としていたと考えられる。そのことは、中心地として想定したタッペ・ジャラリエエ及びキャルーラズの性格からも指示される。これらの遺跡の特徴は前述したように、特殊精製土器の大量保有や土偶、大型土器、貴金属製品の埋納といった点にある。こうしたことから、これら集団間の関係は具体的には、祭儀の画一化を紐帯としたより社会的組織原理に基づく性格のものであったと考えられる。

一方で、このような画一化はあくまで手段であり、その背景として、それにより目指されたより現実的な側面も考慮する必要がある。特殊精製土器の流通と同時に起こるセフィード・ルード川西岸での遺跡の急増及び新規居住、支流別遺跡分布パターンの出現は、階層分化に伴う生産単位の細分化、あるいは既存の集落が分散した結果の増加とも考えられる。そうなれば、集団間関係の強化は生業の分業化や協業化の進展した地域社会の統制、ひいては経済的基盤の確立が目指された結果とも考えられるのである。

こうした点を重視すると、鉄器時代 III 期のセフィード・ルード川西岸への集約化と交流網の緊密化は社会的で、おそらくは政治的な性格を帯びていたのだろう。これは、地理条件に左右され、地域ごとに異なる土器の様相を呈していた鉄器時代 I 期や II 期までとは大きく異なる傾向といえる。III 期における包括的な地域集団関係のあり方は、前時期までの排他性あるいは流動性の強い地域集団の様相と比べれば、大規模な政治集団形成には有効であったと考えられる。既存の地理条件や生業形態等の差異には左右されず、領域を拡大することが可能になるからである。このような地域集団の集積、有機的關係が該期の領域国家の基底構造として機能していたことは十分に想定できよう。

(2) 予察 - 地域集団の変化と領域国家出現との関連性 -

i) 考古学からの検証

遺跡分布及び土器の地域性から導かれた上記地域集団の様相について、その変化の背景としてど

ういったことが想定できるのか考えてみたい。その際、例えば生業形態や気候の変化等も考慮すべきだが、ここでは本稿の趣旨に沿い、鉄器時代 III 期に出現する領域国家との関連性について、その蓋然性の検証をおこなう。

まず参考とするために、イランのほかの地域と比較してみたい。すると、II 期における遺跡の減少や III 期における遺跡の急増といった現象は、ハマダーンを中心とするイラン北西部に類似する。さらにいえば、こうした傾向はイランのなかでも北方で特徴的な現象であったと指摘することが出来る。ザグロス山脈北部では、鉄器時代 III 期における土器と遺跡分布の画期は、前述したようにメディア王国という王朝の出現としばしば結び付けられて考えられてきた (Young1967)。特に土器の均質化に関しては、メディア王国の成立に伴うもので、その範囲はメディア王国の勢力版図ととらえられがちである (Genito2005)。

では、カスピ海南西岸域で同様のことがいえるのかということが問題になってくる。そこで、遺跡分布と土器についてももう少し細かくみてみると、セフィード・ルード川西における遺跡の増加に伴い特徴的に出現するのはテペ状の居住遺跡で、そもそもテペ状遺跡がめずらしい当該地域でテペが築造されはじめるというのは社会的、経済的に大きな変化ととらえられる。また、遺跡分布や土器はこの時期極めて急激に変化する。当該地域における鉄器時代 III 期の新規居住率 (85.2%) はハマダーン周辺 (61%) と比較しても高い割合といえよう。そうした点からもメディアのとは断定できないまでも、外部からの圧力や影響があったと考えてよいのではないと思われる。

また、採集土器から明らかになった鉄器時代 III 期に特徴的に広がるようになる精製土器群に注目したい。重要なのはこの土器のなかでも特に 1 類については、南方の、メディア王国の本拠地により近い地域にあるテペ・シアルクでメディア王国の土器と共伴するということである (足立 2006)。こうした、メディア王国とつながりのある土器が、その土器を多量に有していたテル状遺跡が出現する地域に偏って分布し、時期を同じくしてその地域でのみ遺跡が急増するということから、これら現象の間に相関関係を想定することは可能であろう。

ii) 文献史料からの検証

当該期の代表的文献史料とされるアヴェスタの分析結果からは、古アヴェスタ成立から新アヴェスタ成立の期間に、地縁的且つ定住的な社会が形成されたとされている (堂山 2005)。ここでの定住民というのは農耕民ばかりを指すのではなく、農牧民や牧畜民を指すといわれている。このような居住形態の変化が起こった背景としては、教義として牧畜や農耕を中心とする定住生活を推奨していたゾロアスター教の流布と、社会への浸透があったとされている (Boyce1988: 63)。

この変化は生業と居住形態の変化にとどまるものではなかった。「定住地での共同生活や政治支配のために、社会を土地に基づいて区分・整備する必要性が高まったことは十分に予想される。つまりアヴェスタ社会は、定住化にともない、それまでの血縁に基づく観念的な社会区分を、今度は土地に結びついた具体的な区分として再定義し、有機的な組織体系へと再編成する必要があったといえるであろう」(堂山 2005: 248)。生業等の変化にともない、社会組織まで改変されていったこ

とが示唆されているのである。そこから、「古アヴェスタと比較して新アヴェスタにおいては社会区分を示す多くの用例があることから、社会区分の概念化が固まっていった」(同：246)と推測されている。

さらに重要なのは、その「定住に基づく土地中心の社会再編には、自ずと政治的要素が伴っていた」(同：251)という点であろう。定住的地縁集団を基礎とした社会再編はゾロアスター教の教義がめざす安定した社会に至る道程だったが、それは同時に領土支配という政治政策をも可能にするものとして、政治的に利用されていた様子が示されている。こうした、いわば利害関係が一致しているところからも、当時ゾロアスター教の教義と政治は不可分であったと考えられる。現に、メディア王国にはマグ(*magu-*)というゾロアスター教の祭官集団がいたとされている(Hoffmann1979:90)。そして、そのマグは政治的・宗教的影響力を併せ持っていたと考えられている(同)。おそらく上記のような政策を主導的に行っていたのであろう。

以上より、文献史料からはそれまで移住型の生活を営んでいた人々が、ゾロアスター教の教義とそれを利用した政治政策により相対的に定住的な生活形態に移行したことが明らかになる。そして、その結果として、社会区分及びそれに基づく社会組織が再編され、固定化され、領域的な支配と政治政策が可能になったのである。鉄器時代 III 期における居住遺跡の増加は、この記載にみられるような定住化の結果とも解釈できる。また、副葬土器の広がりも、地縁集団が組織された結果による集団領域の拡大と集団間関係の強化ととらえられる。そのように照らし合わせると、この記載は、前項で指摘した考古学的事象と矛盾しない。これらの相関関係に蓋然性があるならば、今回指摘した現象の背景に文献に記載のあるような政治勢力の政策のあったことが想定されるのである。

iii) まとめ

以上より、鉄器時代 III 期に地域集団の変化を伴う地域社会の再編成がおそらくはメディアの影響によって当該地域に生じた可能性は否定できないであろう。また、遺跡分布や土器分布から指摘された鉄器時代 II 期における集団の可塑性が、そうした影響を受容する潜在条件としてあったという解釈も可能になる。こういった点を積極的に検討していくことで、従来その性格はじめ地方支配体制や成立過程が不明瞭なままで、時にはその実態に疑問が呈されることもあった(Brown 1990; DeMatran1993; Razmjou2005; Sancisi-Weedenburg1985, 1987, 1988)メディアという王朝の性格について、今後新たな見方を提示できると考えられる。

VIII. 結論

本稿では従来遺跡分布研究が行われてこなかったイラン北部の一地域について独自に各遺跡の時期区分を行い、鉄器時代における通時的変遷を把握した。また副葬土器や精製土器の地域性及び分布傾向から、それら諸遺跡の関連性を検証した。

その結果、メディア王国成立期にあたる鉄器時代 III 期には当該地域の地域集団領域の広域化あ

るいは集団間関係の強化がおり、地理条件に左右されず複数の生業形態を包括した交流網が構築されたと考えられる。同時に、そうした有機的関係のセンターとして、テル状遺跡が新たに出現したと解釈できる。これは、地理条件に左右され、地域ごとに異なる土器の様相を呈していた前時期までとは大きく異なる傾向である。また遺跡分布もこの時期、新たなセンターが出現する地域で特に居住遺跡が増加し、面的に広がる高密度の遺跡群が出現する。こうした地域集団のあり方は、前時期までの断絶的且つ排他的、流動的な地域集団の様相と比べれば大規模な政治集団形成には有効であったと考えられる。また、このような地域集団の集積が該期の領域国家の基底構造として機能していたと想定できよう。

本稿では政治組織の規定構造としての社会集団という観点から遺跡分布や土器の地域性、それらの変化をとらえたため、本来こうしたデータを検討する際に着目する日常生活圏や生態的要因等については言及し得なかった。この地域の生業に関しては山内和也氏が「垂直方向の移牧」が行われていたのではないかという重要な指摘を行っている（山内 2000, 2006）。この点などは今回指摘した社会集団のあり方とも関連してくると思われ、積極的な検証に値しよう。今後の課題としたい。

謝辞

セフィード・ルード川西岸採集資料とタッペ・ジャラリエ出土資料については大津忠彦先生に実見と発表を許可していただきました。イランでの資料調査中には足立拓朗先生と四角隆二氏にご助言とご助力を賜りました。また、西秋良宏先生には東京大学総合研究博物館所蔵のチャーク・ルード川流域採集資料及びデーラマン出土資料の実見と発表を許可していただきました。記して謝意を表します。

〈引用文献〉

- 足立拓朗 2006 「鉄器時代 III 期からみたメディアの考古学的解釈」『日本西アジア考古学会第 11 回総会・大会要旨集』日本西アジア考古学会、63-69
- 有松 唯 2005 「鉄器時代からパルティア時代にかけてのイラン、デーラマン地域の土器編年」『日本西アジア考古学会第 10 回総会・大会要旨集』日本西アジア考古学会、34-38
- 有松 唯 2007 「イラン、カスピ海南西岸域における鉄器時代文化の地域性とその変化:土器分析を中心に」『西アジア考古学』8: 87-102
- 江上波夫編 1965 『デーラマン I ガレクティ、ラスルカンの発掘』東京大学東洋文化研究所。
- 佐藤 進 1995 「メディア及びペルシアにおける民族と国家の形成」『オリエント』38(2): 16-37
- 鈴木公雄 1974 「「集団」研究のための覚え書き:林報告に対するコメントにかえて」『考古学研究』21(2): 69-76
- 堂山英次郎 2005 「古代イランにおける社会組織の再編:『アヴェスタ』の記述を中心に」前川和也・岡村秀典編『国家形成の比較研究』学生社、232-259
- 西秋良宏・三國博子・小川やよい・有松唯 2006 『東京大学総合研究博物館考古美術(西アジア)部門所蔵考古学資料目録 第7部 イラン、デーラマン古墓の土器』東京大学総合研究博物館。
- 深井晋司・池田次郎編 1971 『デーラマン IV ガレクティ第 I 号丘、第 II 号丘の発掘』東京大学東洋文化

研究所。

- 山内和也 2000 「ギーラン州セフィードルード西岸の古墓群について」『西アジア考古学』1: 89-94
- 山内和也 2006 「イラン・キルマーズ渓谷の文化的景観の出現と変遷」独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター編『叢書 [文化財保護制度の研究] 文化的景観の成立、その変遷 [第18回国際文化財保存修復研究会報告書]』、11-35
- Boyce, M. 1988 AVESTAN PEOPLE. *Encyclopedia Iranica* III: 62-66.
- Brown, S. C. 1990 Media in the Achaemenid Period: the late Iron Age in Central West Iran. In Sancisi-Weedenburg, H. and A. Kuhrt (eds.) *Achaemenid History IV: Centre and Periphery: Proceedings of the Groningen 1986 Achaemenid History Workshop*, pp. 63-76, Leiden.
- DeMatran, L. 1993 Median Empire? *Journal of the Assyrian Academic Studies* 7 (1) : 28-49.
- Fallahiyani, Y. 2004 Manifestation of Iron Age I culture in the ancient cemetery of Jamshidabad in Gilan. *Archaeological Reports* 2: 217-237.
- Fukai, S. and T. Matsutani 1978 *HALIMEHJAN I: The Excavation at Lameh Zamin*, Tokyo: The Institute of Oriental Culture, The University of Tokyo.
- Genito, B. 2005 The archaeology of the Median Period: an outline and a research perspective. *Iranica Antiqua* 40: 315-340.
- Hoffmann, K. 1972 Das Avesta in der Persia. *Prolegomena to the Sources on the History of Pre-Islamic Central Asia*: 89-93.
- Hakemi, A. 1968 Kaluraz and the civilization of the Mardes. *Archaeologia Viva* 1: 63-65.
- Hakemi, A. 1973 Excavation Kaluraz, Gilan. *Bulletin of the Asia Institute of Pahlavi Museum* 3: 1-7.
- Hole, H. (ed.) 1987 *The Archaeology of Western Iran, Settlement and Society from Prehistory to Islamic Conquest*, Washington D.C. and London: Smithsonian Institution Press.
- Levine, L.D. 1987 The Iron Age. In Hole, H. (ed.), *The Archaeology of Western Iran, Settlement and Society from Prehistory to Islamic Conquest*, pp. 229-250, Washington D.C. and London: Smithsonian Institution Press.
- Miller, F. N. and K. Abdi 2003 *Yeki bud, yeki nabud: Essays on the Archaeology of Iran in Honor of William M. Sumner*, Los Angeles: Regents of the University of California.
- Miroschedji, P. D. 2003 Susa and the highlands?: major trends in the history of Elamite civilization. In Miller, F. N. and K. Abdi (eds.), *Yeki bud, yeki nabud: Essays on the Archaeology of Iran in Honor of William M. Sumner*, pp. 17-38, Los Angeles: Regents of the University of California.
- Moghaddam, A. and N. Miri 2003 Archaeological research in the Mianab Plain of Lowland Susiana, South-Western Iran. *Iran* 41: 99-137.
- Negahban, E.O. 1996 *Marlik: The Complete Excavation Report*, Philadelphia: University of Chicago Press.
- Ohtsu, T., K. Yamauchi and J. Nokandeh 2003 *Preliminary Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan First Season, 2001*, Tokyo: Iranian Cultural Heritage and Tourism Organization and Middle Eastern Culture Center in Japan.
- Ohtsu, T., K. Yamauchi and J. Nokandeh 2004a *Preliminary Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan Second Season, 2002*, Tokyo: Iranian Cultural Heritage and Tourism Organization and Middle Eastern Culture Center in Japan.
- Ohtsu, T., K. Yamauchi and J. Nokandeh 2004b *Preliminary Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan Third Season, 2003*, Tokyo: Iranian Cultural Heritage and Tourism Organization and Middle Eastern Culture Center in Japan.
- Ohtsu, T., K. Yamauchi and J. Nokandeh 2005 *Preliminary Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan, Fourth Season, 2004*, Tokyo: Iranian Cultural Heritage and Tourism Organization and Middle Eastern Culture Center in Japan.

- Ohtsu, T., K. Yamauchi, J. Nokandeh and T. Adachi 2006 *Preliminary Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan, Fifth Season*, Tokyo: Iranian Cultural Heritage and Tourism Organization and Middle Eastern Culture Center in Japan.
- Razmjou, S. 2005 In search of the lost Median art. *Iranica Antiqua* 40: 271-313.
- Samadi, H. 1959a Les decouvertes fortuites. *Arts Asiatiques* 6 : 175-194.
- Samadi, H. 1959b *Les Decouvertes Fortuotes Klardasht, Garmabak, Emam et Tomadjan*, Tehran, Musee National de Tehran.
- Sancisi-Weedenburg, H. 1985 What about the Median Empire? *Fifth Achaemenid History Workshop*: 1-17.
- Sancisi-Weedenburg, H. 1987 Decadence in the empire or decadence in the sources? From sources to synthesis: Ctesias. In Sancisi-Weedenburg, H. (ed.) *Achaemenid History I: Sources, Structures and Synthesis, Priceedings of the Groningen 1983 Achaemenid History Workshop*, pp. 33-45, Leiden.
- Sancisi-Weedenburg, H. 1988 Was there ever a Median Empire? In Kuhrt, A. and H. Sancisi-Weedenburg (eds.) *Achaemenid History III: Method and Theory: Priceedings of the London 1985 Achaemenid History Workshop*, pp. 197-212, Leiden.
- Sumner, W. M. 1986 Achaemenid settlement in the Persepolis Plain. *American Journal of Archaeology* 90: 3-31.
- Young, T.C., Jr. 1967 The Iranian migration into Zagros. *Iran* 5: 11-34.
- Young, T.C., Jr. 1975 Kangavar valley survey. *Iran* 13: 191-193.
- Young, T.C., Jr. 2002 The Kangavar Survey-The Iron Age. *Iranica Antiqua* 37: 419-436.
- Young, T.C., Jr. 2003 Parsua, Parsa, and potshards. In Miller, F. N. and K. Abdi (eds.), *Yeki bud, yeki nabud: Essays on the Archaeology of Iran in Honor of William M. Svmnar*, pp. 243-248, Los Angeles: Regents of the Vniversity of California.

Community of the Iron Age and its construction in the north part of Iran: Analysis of settlement system and regional variability of pottery

Yui Arimatsu

Abstract

In Islamic Republic of Iran, since 1 millennium BC, the states such as the Achaemenid Persian and the Median kingdom had been established. About the formation process and the reality of these forces, the historical literature could reveal the details of them are limited. So archaeological research activities have been often carried out. But these analysis has been limited to the west part of Iran, the region along the Zagros Mountains. Because the region of these states were vastness, analysis and interpretation have been carried out in terms of relatively broad perspective. Such perspective is of course necessary, but no matter how vast state they were, the real construction of them should have been accumulation of a lot of community, which were made up local groups and the individual irregularity. Elucidation of these specific structural is also essential for understanding them.

This paper aims to study community as a base structure of political power, and its structure and formation process, and analyzes site distribution and pottery distribution during the Iron Age (1450 - 550BC) in the north part of Iran which has not been object of these studies. As a result, community became wider or intergroup relations was enhanced during the Iron Age III, the Median period. Comprehensive network, which had not been influenced by the geographical conditions and had included some calling groups, would have been constructed. At the same time, tell type sites would have emerged as a center of such relationship. Especially in the area where new center had emerged, number of residential sites had increased and the high-density and wide-spreaded site group had formed. It is significantly different situation from the previous periods in which sites had been scattered depends on geographical conditions and pottery had serious regional differences. Comparing to such an exclusive and fluid community, community of the Iron age III would have effectively functionated for forming the large-scale political groups. It would be able to point out that there were these trends in the background of the emergence of political forces in this period.